音楽はみんなのもの

――芥川 也寸志



写真・木之下 晃

追悼・芥川 也寸志

Préludes pour orchestre symphonique

Largo (♪ = 72)

Piccolo

2 Flauti — Solo — pp

2 Oboi

Corno inglese

2 Clarinetti in si b

Clarinetto basso in si b

2 Fagotti

Contra fagotto

Largo (♪ = 72)

4 Corni in fa

2 Trombe in do

3 Tromboni (basso)

Tuba

4 Timpani in

Largo (♪ = 72)

Arpa

Piano

Largo (♪ = 72)

Violini I

Violini II

Viol.

Violoncelli

Contrabassi

Solo — mp poco molto espress. poco — 5 — poco

div. sul tasto — pp — div. — pp — sul

追悼・芥川也寸志

新交響楽団第126回演奏会

1990年1月20日(土) 7:00 p.m.
新宿文化センター
指揮・山田一雄(新交響楽団名誉指揮者)

交響管絃楽のための前奏曲1947
森のすきなおとなとこどものための音楽童話
ポイパの川とポイパの木1979
文・岸田 衿子
語り・岸田今日子
交響曲第1番1954

主催・新交響楽団

芥川也寸志追悼コンサート

1990年1月27日(土) 6:30 p.m.
埼玉県松伏町　田園ホール・エローラ*
指揮・森山　崇

交響管絃楽のための前奏曲1947
絃楽のための三楽章(トリプティーク)1953
交響曲第1番1954

主催・松伏町文化振興事業団
*「田園ホール・エローラ」は構想の段階から参画した芥川氏が自らの作品「エローラ交響曲」にちなんで命名したもの。

芥川也寸志追悼演奏会

1990年1月28日(日) 2:00 p.m.
旧東京音楽学校奏楽堂
指揮・山田一雄
司会・黛　敏郎

交響管絃楽のための前奏曲1947
絃楽のための三楽章(トリプティーク)1953
交響曲第1番1954

主催・財団法人台東区芸術・歴史協会
後援・台東区教育委員会
制作協力・東京コンサーツ

山田 一雄(指揮)



1912年東京生まれ。1935年、東京音楽学校ピアノ科卒業、37年専攻科修了。マーラーの弟子ブリングスハイムに作曲を学び、日本放送協会懸賞1等、ワインガルトナー賞などを得て作曲家としての地位を築く一方、ローゼンシュトックに指揮法を学ぶ。1941年新交響楽団(現N響)補助指揮者、翌42年、日本交響楽団と改組の際、専任指揮者に就任。マーラーの交響曲第8番、ストラヴィンスキー「春の祭典」、ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」等、多くの日本初演、邦人作品初演を手掛け、日本の音楽界の指導的役割を果たした。

現在、京都市交響楽団芸術顧問正指揮者、新星日響名誉指揮者、日本マーラー協会理事長等をつとめる他、東京芸大、武蔵野音大等で指導にあたっている。

76年紫綬褒章、78年芸術選奨文部大臣賞、84年勲四等旭日小綬章、86年芸術院賞を受けた。84年より当団名誉指揮者。

森山　崇(指揮)



1946年生まれ。1966年早稲田大学理工学部入学と同時に同大学交響楽団に所属、ティンパニ奏者およびトレーナーとして活躍した。山岡重信氏、故福富俊一氏など多くの先輩より多大の影響を受ける。また打楽器を野口力氏(読響)、作曲を飯田隆氏に師事。指揮は特に師事した人はなく、「レコードや演奏会で接する指揮者はすべて先生」とは本人の弁。本業は印刷会社に勤めるサラリーマンという、純然たるアマチュア。現在高田馬場管、早稲田大学フィル、新潟大学管、新潟室内合奏団および新響で指揮者またはトレーナーをつとめている。

岸田今日子(語り)

東京生れ。自由学園高等科を卒業の後、文学座附属演劇研究所を経て文学座に入る。1950年「キティ颱風」で初舞台、1960年「陽気な幽霊」でテアトロン賞を受賞。1963年文学座脱退。劇団雲創立参加。「聖女ジャンヌダーク」などに出演。1975年には演劇集団円に設立参加。「今日子」「欲望という名の電車」などに出演、現在に至る。また「砂の女」「竹取り物語」「利休」など映画、テレビなどでも活躍している。

「交響管絃楽のための前奏曲」作曲前後

富樫　康

戦後も間もない頃、空襲で荒廃した東京に進駐軍が我がもの顔に濶歩する街中に、これまた復員したばかりの軍服姿で外出する男の多かった東京は、食糧難、住宅難、職業難、それに容赦なく襲ったインフレによる物価高で、国民は何をするあてどもなく、徒らに街中をうろうろして暇をつぶす人々で溢れていた。しかし敗戦で失うものが多く、苦しい生活を強いられた市民たちではあるが、その一方では、もう恐ろしい空襲のなくなった、燈火管制の必要もない生活ができること。兵役や徴用で死線にかり出される必要のない生活ができること。それだけの自由が与えられただけでも、心理的に圧迫感の取り払われた、開放的な明るい気分になることができたのを喜んだのである。

その頃、東京音楽学校の作曲科に学んでいた芥川也寸志は、一時戦争で学徒動員にかり出された時期に、陸軍々楽隊に入隊させられて、團伊玖磨とともに一年間の軍隊生活を送ったのである。それも敗戦によって再び上野の森に戻ったとき、学校は戦後部分的に教育陣の改革があり、校長に夏目漱石の弟子で有名なドイツ文学者の小宮豊隆氏が就任した。氏は作曲科に母校出身でない、パリ国立音楽院出身で、俳人高浜虚子の子息である池内友次郎と、もう一人独学ではあるが、北海道で林野官をつとめながらその民族的な管弦楽が国際的なチェレプニン賞に入賞する等、作曲活動をしていた伊福部昭を起用したのである（器楽科ではまだ若いピアニストの安川加寿子を起用したのもその時である）。今は亡き作曲家の早坂文雄と今も健在の伊福部昭は、同じ札幌で活動していた独学の作曲仲間で、早坂は戦前彼の管弦楽≪古代の舞曲≫がワインガルトナー賞に入賞して日比谷公会堂で演奏されたとき、それを偶然ききにきた随筆家の森田たま（「木綿随筆」で爆発的な人気作家となった人）が同じく札幌出身であったことから、大変感動して、知人の東宝映画秦社長に薦めて、映画の専属作曲家に早坂を起用した経緯がある（早坂は黒沢明監督「羅生門」や「七人の侍」等にコンビで仕事をしたことでも有名）。森田たまは同じく夏目漱石の弟子仲間であったことから小宮豊隆に伊福部を起用することを助言したのであろう。

伊福部氏は札幌時代、パリ作曲界の変り者サティを好み、グループ「新音楽連盟」でサティの≪梨の形をした三つの小品≫を初演したことがあるが、昭和21年上野の教壇に立った伊福部氏の講義は、官学の最高学府とは凡そ似つかわしくもない、在野的で、しかもひどく興味のあるもので、生徒の間では特別人気があったらしい。その最初の講義をきいた芥川は、すっかり伊福部先生の虜となり、その日、その足で当時日光の山奥に住んでいた先生に同行して（当時東京は家がないのに人口の急増で、住む家の保証がなければ外部からの転入は許されなかった）、三日三晩先生の家に泊りこんで、一言一句漏らさず話をきいたのである。その結果、芥川は師の影響を全身にうけたような形で、昭和22年（1947）卒業作品≪交響管絃楽のための前奏曲≫を作曲、これを放送初演した。筆者はその放送をきいたとき、当時執筆していた新聞「世界日報」に批評を書いた覚えがあるので、探してみたが、残念ながら見当らなかった。そのときはわれわれも戦後の新人を求めていた時期だけに、その新鮮な管弦楽法による歯切れのよい日本的な感触の作品に心打たれ、歓迎したのである。しかし難を言えば、それは余りにも伊福部音楽に近似しているために、そのレーゾン・デートルの点では問題が残ったのである。そんなことを批評に書いたためか、芥川はこの作品をその後公開しないでしまった。従って今回の演奏はステージで始めて演奏される記念すべきイヴェントである。

翌年の≪交響三章≫からは、明確に芥川の独自性をもつようになり、それに続く≪交響管絃楽のための音楽≫、≪トリプティーク≫は芥川の三大傑作と筆者は愚考している。

それ以後の作品は大分傾向が変ってきたので、うけとる側の批評の仕方もまちまちである。一時、マイナスの空間を説えた時期もあったが、その後間もなく、オスティナートを前面に押し出す傾向に変っていった。その中でのヤマハ製の電気オルガンの為に1974年に作った≪GX コンチェルト≫を筆者は気に入っているのだが、特殊楽器を使うせいかその後再演された様子はない。　（音楽評論家）

作曲年代＝1947年／楽器編成＝Picc., 2 Fl., 2 Ob., Cor Ing., 2 Cl., Bass Cl., 2 Fag., Contra Fag., 4 Hr., 2 Tp., 3 Tb., Tuba, Tim., Hp., Piano, 弦5部

森の好きなおとなとこどものための音楽童話
ポイパの川とポイパの木

渡壁　輝（あきら）（談）

この「ポイパの川とポイパの木」の生みの親の一人とも言える方で、NHKで『音楽の広場』や『N響アワー』の番組を通して芥川也寸志氏とは縁の深かった渡壁輝氏にお話を伺いました。

――この曲はテレビで放送されるために作られた、ということでしたが、放送はいつでしたでしょう？

番組の中にもあったように、この年は国際児童年なので何か子供も大人も楽しめるものを、という企画でした。

そもそも芥川さんと『音楽の広場』でご一緒するようになったのが、1977年の4月からで、この番組が実現したのは国際児童年の79年、放送は5月3日夜7時20分から8時までででした。

芥川さんの作品リストにもNHK委嘱作品と書いてある通り、番組のために作曲していただいたものです。

――『音楽の広場』とは別の特別番組だったわけですね。

はい。芥川さんとは常々、「物を創る人間として子供の心を失わないようにしよう、子供の心を持った大人でありたい。」とよく話していたんです。

芥川さんは、本当に子供好きでして。よく楽譜にかわいい

子供の絵を描いていらした。それが僕も本当に好きでね……胸に温かいものがこみあげてくるんです。子供は素晴らしいから大事にしなきゃ、というか、次の世代を担う者へのやさしい想いが本当に在ったと思うんです。『音楽の広場』でご一緒していた黒柳徹子さんも、子供や動物が大好きだったので、このチームで何かやれないかな、ということだった訳です。

それで、大人も子供も楽しめる美しい音楽童話が実現したら素敵だという夢が、国際児童年ということで盛り上がって、芥川さんを中心にみんなの気持ちがまとまったのだと思います。芥川さんご自身は二、三年前からこういうものを書きたいという構想をお持ちだったらしいんです。

――では、音楽もお話も書き下しだった訳ですね。

そうです。これ全部が新作。大体40分の放送時間で収まるように、ということになりまして、わざわざ話も詩人の岸田衿子さん――岸田今日子さんのお姉さんにあたる方に作って頂いて。番組は、音楽を聞きながら絵本を読んでいくという構成にしました。

結局、番組のスタッフは、文：岸田衿子、絵：上野紀子、音楽と指揮：芥川也寸志、演奏：東京フィルハーモニー交響楽団、語り：黒柳徹子、そして演出は私でした。

――スコアに挟まれていた台本を見るとかなりスケジュールが厳しかったように見えますが。

放送のものはいつもスケジュール的にギリギリの仕事が多いから、特にこれだけが珍しいという訳ではなかったとは思いますが、確かに厳しいものだったと思います。因みに番組制作のスケジュールも押してまして、スタジオ収録は、放送二日前の午前11時から始まって、少なくとも午後11時頃まではかかったと思います。その翌日にビデオの編集をして、放送当日未完成のままオーディションをやって。放送直前の午後6時までかかって字幕とか入れて仕上げたんです。

番組では、森の中のオーケストラといった感じを出すのにちょっと工夫をし、それを芥川さんはとてもお気に召していたようです。

――見ていて、とても夢がありますね。

番組は、厚生省から第22回児童福祉文化奨励賞を翌年の5月に受賞しました。この『ポイパ』や『音楽の広場』の仕事があって、又、1981年に芥川さんに作曲をお願いして、映像絵巻『月』という竹取り物語をベースにした番組が誕生した訳です。そちらはイタリア賞特別賞やエミー賞優秀賞をもらったんですけれども。『ポイパ』のほうが語りも入るので、より多くの人が多角的に楽しめるように思います。

――最後になりますが、長いこと一緒にいろいろな仕事をなさった方としての芥川像をお聞かせいただけますか。

『音楽の広場』以前は仕事をご一緒したことはなかったのですけれど、『広場』に来ていただいてから、亡くなられるまで、お互いに信頼という絆で結ばれ、本当に良い仕事が出来たと思います。その一つが『ポイパ』でした。これからも心の糧として大切にしたいと思っています。

よく『広場』で旅をしまして、地方のアマチュア合唱団や児童合唱の子供さんを指揮している時、とっても良い顔をしていらしたのを今でも覚えています。そういう良いお顔をカメラを通して捉えるのが楽しみでした。芥川さんに子供の顔をオーバーラップさせると、とっても良かった。

そうした、芥川さんの音楽に対する姿勢を伝えることによって、皆に音楽の楽しさを広げていく、というのが番組の制作側としてはねらいだった訳ですけれども、今日の演奏会のタイトルにもなっている“音楽はみんなのもの”というのが、これがやっぱり芥川さんの全て、というか心だったんじゃないでしょうか。僕はそう思います。

（サントリーホール副支配人。元NHKプロデューサーで、音楽番組を数多く制作・演出。）

作曲年代＝1979年／楽器編成＝Picc., 2 Fl., 2 Ob., 2 Cl., 2 Fag., 4 Hr., 2 Tp., 2 Tb., Euph., Tim., 小太鼓, 大太鼓, Glock., Cymb., Hp., 弦5部

芥川也寸志の音楽語法について
――交響曲第一番を中心にして――

毛利蔵人

芥川さんと私とは25歳の年齢差がある。ほぼ一世代の違ひといへよう。私たちの世代の作曲家、つまり戦後生まれの作曲家たちは、外国の作曲家から多くを学ぶと同時に、いや、もしかしたらそれ以上に我国の先輩の作曲家に負ふ所が多いのではないかと思ふ。少くとも私自身はさうだ。私事に触れることをお赦し願ひたいが、音楽の専門教育を全く受けたことのない私にとって、同じ時代に生きる日本の作曲家の作品を聴くことが何よりも刺激となり、滋養となった。芥川さんの音楽は、その様にして私が身近に感じた幾人かの日本の作曲家のひとりの作品として私の前に表はれた。後輩の作曲家が先達の作品をどの様に聴くかを語ることは、結局は私的な想ひを述べることでしかないが、そのことによって、芥川さんの音楽を愛聴する人がより一層ふえることにつながるかも知れないと考へ、新響からの御依頼を受け、拙稿を綴る次第となった。

芥川さんの音楽は明快で解り易い。これは驚くべきことだ。一般に「現代音楽」は難解だと思はれてゐる。これには幾らでも反論できるのだが、ここはそれをする場ではないので省略するが、多くの人が私たちの音楽をむづかしいと、実際に思ってゐる中で、芥川さんの音楽をむづかしいと感じる人はまづゐないだらう。ただ、この点が最も重要なことなのだが、むづかしい音楽を書くのは、ある意味では容易だが、解り易い音楽を書くのはむづかしいことであって、並の能力の人にできることではないのだ。

芥川さんの音楽の特徴を具体的に挙げてみよう。

一．旋律が明瞭で美しい。

一．リズムがはっきりしてゐる。特にテンポの速い曲では、オスティナートに乗ったシンコペーションが著しい。

一．和声構造が明確である。

一．楽曲構成の起承転結がはっきりしてゐる。

一．それぞれの楽器の機能が充分に発揮できる様に書かれてゐる。

まだ他にもあるかも知れないが、これらが個々に独立して存在するのではなく、有機的関連性を保ちつつ音楽が構成されてゐることは改めていふまでもないだらう。

次にこれらについて今日の最後に演奏される大曲、交響曲第一番から実例を挙げて見て行かう。

第１楽章の冒頭､四六の短三和音のクロマティック下降と、ひとつの共通音をもつ短三和音の下降に支えられて、クラリネットのソロに始る旋律が上行する。ここでの短三和音は機能和声としては働いてゐないので、基本位置か転回型のいづれかは、さ程重要ではない。しかし、平行進行であることと、クロマティック下降であること、及び上声部と下声部が反進行することが、この壮大なシンフォニーを支へてゐる最も重要な柱のひとつであることは次第に意識されてくるだらう。（譜例①）

やがて同じ旋律がオクターヴ上で第１ヴァイオリンによって歌はれるとき、副次的な対旋律が加はり、冒頭と同じ和声進行の中で、低音の縮小型による、より重要な対旋律が聞こえる（譜例②）。そして、それらの絡み合ひのうちに、*ff*でＡ音に達するとリズム動機が表はれ、(譜例③)、そこまでが、その動機を導くための長いアナクルーズであったことに気づくと同時に、Ａ音への指向性を強く感じる。そのリズム動機は、短三和音の響きの中で声部をふやしつつくりかへされ、やがて低音のＡ、Ｅのドミナント進行に支へられた短三和音の平行に*ff*のテュッティで到達し、はっきりとした姿を見せる（譜例④）。このモチーフは後の楽章でもしばしば聞かれる。さらに、このリズム動機から導かれた絃楽合奏のシンコペーションに乗って、木管楽器に新しい旋律が表はれる。その旋律はオクターヴ上行が特徴で、付点リズムと三連音も新たに加わる。内声部にはクロマティック上行が聞こえる(譜例⑤)。順次声部をふやしつつテュッティで*ff*に達した後に冒頭の旋律が長二度上で、やはりクラリネットによって弱く奏された後に、コントラバスをのぞく絃楽合奏で、また新しい旋律が表はれる（譜例⑥）。しかしこの旋律は、よく聴くと冒頭のそれと良く似てをり、他の様々なモチーフと組み合はされて展開して行く。

第２楽章は軽快なスケルツォだ。芥川さんはテンポの速い音楽を得意とする数少ない作曲家のひとりだ。絃楽器によって提示されたモチーフ（譜例⑦）を木管楽器が受け、絃がさらにひきついで金管群に渡す、といふ様に主として各楽器群間の音色の運動性の面白さを聞くことができる。せまい音域内の限られた音の組み合せを、リズム、フレージング、アーティキュレーションの変化によって様々に変容させる手法は、つとに芥川流といへよう（譜例⑧）。しかも、この例の場合に顕著である様に、伴奏音型はひたすら同じパターンをくりかへすので、少しづつ変化する主声部との対照が、より一層はっきりとする。やがて譜例⑨のリズムが絃のユニゾンに始り、木管、金管と少しづつ加はってテュッティに至るが、このときオーケストラの各楽器は最も良く鳴る音域で自然に最強音に達することができる様に周到な配慮が施されてゐる。譜例⑩にテュッティに至った際の各楽器の配置を示さう。

第３楽章はコラール。ここでは長短両三和音の組み合せと、上声、下声の反行が著しい（譜例⑪）。絃の弱音に始るコラールは、次第に他の楽器も加はって、重層的にぬり重ねながら*ff*へ向ふ。次に、うすくオーケストレーションされた対位法的部分が、コラールと対照的に置かれ（譜例⑫）、第１楽章のリズム動機が復帰する（譜例⑬）。その後はコラールの再現である。

終楽章はアレグロ・モルト。最初のテーマは、例によって楽しいリズムの遊びが、規則正しい刻みに乗ってくりひろげられる（譜例⑭）。ここでも短三和音が圧倒的に優位を占めるが、長三和音に乗った副次的モチーフによるブリッジが、その後にすぐ続く短三和音のクロマティック下降との鮮やかなコントラストを見せる（譜例⑮）。やがて木管と絃の増三和音が響き渡る中で、ホルンとトロンボーンの楽句が朗々と鳴る（譜例⑯）。増三和音の出現は初めてなので、極めて新鮮に聞こえる。さらに第１楽章のモチーフに基く金管の強奏を経て、バスのＤ音の持続上に例のリズム動機がまた聞こえてくる。(譜例⑰)

以上、交響曲第１番について特徴を幾つか述べたが、この大曲で集大成されたともいへる書法は、今日演奏されるそれ以前のふたつの作品、「交響管絃楽のための音楽」と、「絃楽のための三章」に於てもすでに試みられてをり、さらに今年、1986年の作品である「アレグロ・オスティナート」に至るまでも一貫してゐる。

最後に、昨年の６月にガンのため、46歳で逝った作曲家八村義夫が芥川さんについて書き残した文章の一節を引用して拙稿を終へることとしたい。

……実に異常なリアリティと切れ味の鋭い才能を持っている人だ。（中略）才能というものはおそらく外的には最も目だたない個所においてつかわれ、その堆積が最大限の効力を発揮するようにしておくのが、才能の、いわば基本的な使い方なのだ……　（作曲家）

〔八村義夫著「ラ・フォリア」草思社刊より〕

譜例―①



譜例―②



譜例—③



譜例—④



譜例—⑤



譜例—⑥



譜例—⑦



譜例—⑧



譜例—⑨



譜例—⑩



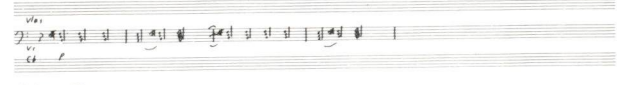
譜例—⑪



譜例—⑫



譜例—⑬



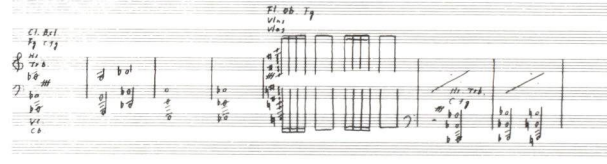
譜例—⑭



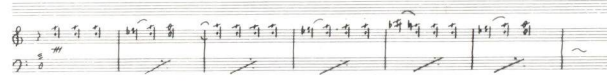
譜例—⑮



譜例—⑯



譜例—⑰



作曲年代＝1954年／楽器編成＝Picc., 2 Fl., 2 Ob., Cor Ing., 2 Cl., Bass Cl., 2 Fag., Contra Fag., 6 Hr., 3 Tp., 3 Tb., Tuba, Hp., Tim., 大太鼓, 小太鼓, Cymb., Tamtam, 木琴

絃楽のための三楽章
——トリプティーク——

富樫　康

≪絃楽のための三楽章≫（トリプティーク）は、1953年にオーストリーの指揮者クルト・ヴェスの依頼により書かれたもので、≪トリプティーク≫とは三連画の意味である。初演は同年12月カーネギー・リサイタル・ホールでヴェス指揮ニューヨーク・フィルハーモニーの演奏により行われた。その２年後にはモスクワ労働組合会館で、ニコライ・アノーソフ指揮、全ソ放送交響楽団により演奏され、楽譜は1956年State Music Publishers : Moscow から出版された。

その後ヨーロッパではベルリン、ウィーンその他の主要都市で数多く演奏されている。

この作品は彼が弦楽オーケストラ曲に対してもなみなみならぬ力量の持ち主であることを示している。元来ヴァイオリン属は旋律楽器である為に、管楽器や打楽器を交えないで近代性を打ち出すことは困難とされていたが、作曲者は≪絃楽のための三楽章≫の中で、彼独自の語法を使いながらも、その難業を見事に克服している。どの楽章においても対位法の巧妙さは特筆に値するものである。

旋律が最も美しく歌われる第２楽章「子守歌」の中にはノック・ザ・ボディの日本的なリズムが心憎いばかりの効果をあげている。

第３楽章のモティーフには、日本の祭り太鼓のリズムが使われている。第１楽章の歯切れのよい小刻みのリズムも甚だ爽快な気分をもたらす。

芥川の音楽には滓が残らない。その小ざっぱりした味わいは、江戸時代から東京人に伝えられた芸術的気質なのである。

（第113回演奏会プログラムより）

作曲年代＝1953年／楽器編成＝弦５部

追想・芥川也寸志

写真・文　木之下　晃

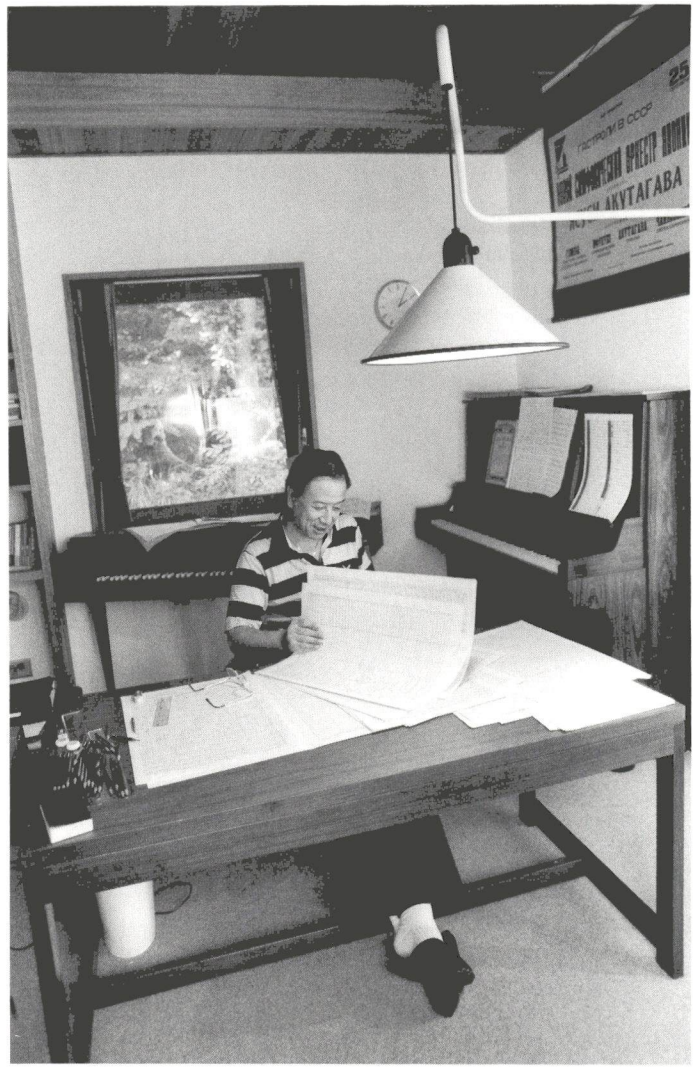
芥川さんから電話が入って、ホテル・オークラ別館のロビーで行き会ったのは77年の２月24日の午後だった。

新響が小倉朗氏の作品展を演奏するにあたって、音楽会とドッキングして写真展を開くことは出来ないかという相談だった。音楽会まであと一年あるから、その間に小倉さんを写せば何とかなると思い、早速３月14日に芥川さんと一緒に鎌倉・二階堂の小倉さん宅にお邪魔した。それから一年といっても、実際には８月中旬過ぎてから小倉さんを写し出し、結局は時間がなくなり切羽詰まっての撮影になった。

この音楽会と写真展を同時に開くという芥川さん発案の企画を、芥川さんの演奏会で是非とも実現させたいと考え、小倉さんの時の反省もあって、折々に写しためて行くように心掛けていた。

そのことを芥川さんご自身は別に意識されてはいなかったけれど、あの多忙なスケジュールの中で、時折、撮影の場を作って下さった。カメラマンにとって、何が一番有難度いかといえば撮影するチャンスを作ってもらえることである。忙しい人にこちらから声をかけることはとても申し訳無く思い、結局は尻込みすることになりがちになる。逆にちょっとした折に先方から声をかけられることの嬉しさは格別である。しかし芥川さんとは互に擦れ違うことが多く、全く写し足りないままに芥川さんは逝ってしまった。

私の中で、写真展として発表するにはあまりにも未完であるが、今回の展覧会は悔しさを込めての想い出のアルバムである。



１月24日まで新宿コニカプラザ（東口アルタ隣）４階にて、木下晃さんの写真展「追想・芥川也寸志」が開催されています。



上：北軽井沢の別荘にて。
'86年夏
下：真澄夫人と、愛犬と共に。
'86年９月
成城の自宅にて



上：成城の自宅にて。'86年９月

下：作曲家の小倉朗氏と。'77年３月、鎌倉・二階堂にて。



新響／芥川の演奏を聴いて

長谷川　武久

禅宗の修業禅堂では、朝まだ陽が上がる前、鳥がひと声鳴き始める前から一日が始まる。起床時間には寺中の鐘が叩かれる。キンキンと高い音、カンカンと中位の音、ゴンゴンと低い音、それらがいっせいに鳴らされ、と同時に雲水達は蒲団をはね上げて起き、その蒲団を素早く片付けると、口をすすぎ、本堂に駆け込んでいく。全員が揃うとすぐに朝の読経が始まり、本堂の奥にしつらえられたご本尊が拝まれる。緊張度高い厳しい空気が本堂を支配し、雲水たちは、ますます読経に集中していく。

禅というと、私たちは座禅をする姿をすぐに思い起こす。しかし座禅をするのは修業の中のひとつであって、結局、一心不乱にご本尊を、常にまもり、拝むのが僧たちのつとめ、ということになる。

以前、臨済宗妙心寺派のリーダーの一人であった故・中川宋淵老師にお会いしたとき、老師はベートーヴェンの話をして下さった。話は晩年の弦楽四重奏曲に進んだとき、老師は「晩年のクワルテットを書いていたころのベートーヴェンは悟りを開いていたのではなかろうか」と私に問うて来た。「なるほど、そうかもしれませんね」というのが私の答えだったが、ゆったりした中に内側を深くするどく追求していく老師の姿勢にも打たれるものを感じたのだった。

あるとき老師は「私は僧です」と語り出した。僧は一心不乱にご本尊をおまもりし、拝み、僧としてのつとめをやっていけばよいのだが、「あなたは自分の仕事を一心不乱にやっていけばよい、それが禅です」と言うのであり、それが老師と私との最後の会話になった。老師はその後、再びお会いしてベートーヴェンの談義でもしたいと私が思っている内に亡くなってしまったのである。

故・芥川也寸志さんは、本職の作曲家としての仕事の折もそうだったが、新響の指揮者として指揮台に立つ折にも一心不乱であった。少しでも良い演奏を、と理想追及の情熱にもえ、練習の折などは、こわいほどであったという。その意味から言うならば、悟りを開いていたかどうかはともかく、新響の指揮者として立つときの芥川さんもまた、自己の中の禅を実施していたと言うことが出来よう。

芥川さんは新響のメンバー、一人一人から音楽が湧いてくることを目指していた。「もっと何か表情を出してみてくれ」と、新響のメンバーの持つ自発性を引き出そうと、やっきになっていた。自発的な表現が新響から出て来ないときは、いら立ち、おこることもしばしばであり、そんな折、新響のメンバーは、こわいと感じた。

しかし、芥川／新響の演奏は、波はあったにせよ、非常にうまくいくこともあった。1984年１月29日、新宿文化センターで催された新交響楽団第102回演奏会が、うまくいったコンサートのひとつであり、私はその年の≪音楽の友≫誌３月号で、次のような批評を書いた。

> 「いったい、どういうことなのだろう」と考えさせられたコンサートを聴いた。それは新交響楽団第102回演奏会である。結論からいうならば、すごくよいのである。新響はアマチュアだ。以前にもアマチュアを聴いて体験したことだが、今回もやはり聴いていて熱くなり、満足したのである。コントラバスが、しっかり土台づくりをしていく。だからヴァイオリンは、それにのって弾けばよいような風情であり、のびのび弾き、厚く美しいハーモニーも当然のように生まれていく。管もあやうくなく、これまた当然のこととしてバランスや音色が考えられていて、しかも大きなフレーズで歌っていく。打もしっかりしており、内容的にもドラマづくりを弦や管と共に行なおうとしていく。換言すれば、団員達は全員が「自分達にとって欲求不満にならない演奏を目指す」ことで一致しており、共に盛り上げ、共に爆発し、共にひそやかさを創り、喜怒哀楽を含めて演奏する曲の中にひそむ様々な趣きを目減らすことなく表現しようとしていたのである。だから「オーケストラから音楽が湧き上ってくる」のが感じ取れたのである。指揮者・芥川也寸志は音楽しようという団員達の熱い意思を流れにのせていけばよいという風情ですらあった。モーツァルト、伊福部昭、ショスタコーヴィチの作品が演奏され、伊福部の≪ラウダ・コンチェルタータ≫ではマリンバの安部圭子がソリストをつとめていた。会場は超満員であり、沸いていた。すご味のある演奏を生んだ経験のあるアマチュア、それを聴いて「すごいオケだな」と感動する聴き手は案外多くなってきていると思う。つまり音楽愛好者の方は健康に育ってきているとも思えるのだが、さてそれに対してプロのオーケストラは何をすべきか。今月も幾つかのオーケストラを聴いたのだが、考えさせられた一夜であった。

以上が私の批評文である。この文に出てくるショスタコーヴィチは、交響曲第５番のことであり、≪ラウダ・コンチェルタータ≫と共に今もあの日の感動を思い出すことが出来る。その後、芥川／新響は、1986年７月20日にも新宿文化センターで、ショスタコーヴィチの交響曲第４番を好演していた。また、1988年４月３日、東京文化会館でのオール・ファリャ・プログラムの折の演奏も印象に残っている。しかし基本的には芥川／新響がとくいとしたものは、ロシア＝ソヴィエト音楽であるということが出来よう。芥川のモーツァルトは素朴であって独特の味があった、とも思えるが、しかしモーツァルトは、より洗練された美しさを求めたくもあった。やはりロシア＝ソヴィエト音楽、中でもとりわけショスタコーヴィチは、圧巻であった。

芥川を欠いた新響は、やや勢いが感じられなくなっている。次の音楽的中心人物を早くたてることは望んでおきたいと思う。新響のメンバーと仲よくなって、なれあいで指揮をするような指揮者では、あの芥川／新響の創った世界の足もとにも及ばない域の演奏しか出来ない、かもしれない。

次期音楽監督……あまり忙しすぎない人でいて、新響を育てることに一心不乱になる人……そんな指揮者を早く見つけてほしいものである。

（音楽評論家）

芥川也寸志の世界



芥川也寸志の突然の訃報から一年——

氏の活動の記録であるシリーズ"芥川也寸志の世界"。

30有余年に及ぶ新交響楽団との熱気溢れるライブ録音から、
とくにその紹介に力を注いだ日本の作曲家の作品が、
新たな発売となります。

平成2年1月25日発売

日本の交響作品展(続)

芥川也寸志の世界 — 6

渡辺浦人　交響組曲「野人」(1941)
小倉　朗　交響組曲(1941)
戸田邦雄　交響幻想曲「伝説」(1943)
小山清茂　信濃囃子(1946)
別宮貞雄　管弦楽のための「2つの祈り」(1956)

芥川也寸志＝指揮　新交響楽団

FOCD3265　税込定価 ¥3,000

清瀬保二／管弦楽選集

芥川也寸志の世界 — 7

日本祭礼舞曲(1942)
エレジー(亡き母に捧ぐ)(1937)
原始的舞曲(郷土舞踊より)(1969)
ヒアノ協奏曲*(1954)
古代に寄す(1937)
佐藤敏直　哀歌(1982)

芥川也寸志＝指揮　新交響楽団　*林光＝ヒアノ

FOCD3266　税込定価 ¥3,000

好評発売中

第1集　芥川也寸志　管弦楽選集(続)
CD FOCD3243
第2集　早坂文雄　管弦楽選集
CD FOCD3244
第3集　伊福部昭　管弦楽選集
CD FOCD3245
第4集　日本の交響作品展
CD FOCD3246
第5集　ソヴィエト・中国の交響作品展
CD FOCD3247
各・税込定価 ¥3,000

芥川也寸志　管弦楽選集
CD FOCD3208　税込定価 ¥3,008

本日会場にて即売中

FONTEC RECORDS
株式会社フォンテック
〒167 東京都杉並区荻窪5-22-5
TEL 03(393)0183

写真・木之下　晃

残された言葉から

演奏会のプログラム、団内誌への投稿、シンポジュームでの発言……、芥川先生がアマチュアオーケストラの純粋さを信じ、賭けてこられた想いがひしひしと感じられます。団員として誇りに思い、感謝の気持ちで一杯になります。

又、時代を超えた主張と、時代ごとの主題の変化は、三十余年の歩みの証といえるように思われます。

音楽とは

音楽とは何か――この一見当たり前で、しかも禅問答になってしまいそうな質問に答えることによって、芥川先生はどんな音楽を創って欲しいかを、伝えようとされました。

合奏や演奏会の打ち上げの時には、団員たちと深夜までお酒を汲み交わしながら、多くのことを語られました。

『皆の心の中に、それぞれ風車が在るとする。音楽を聞いて、「ああ、いいなあ」と思って、少し錆び付いていた風車が回る。そうして精神が動いていく――音楽が世界を変えると思うよ。』

人間は誰でも、自然や偶然から生まれた環境をよりよく、より生きやすく、より生きよく、生きたいという欲求を持っています。

人が、立派な芸術に接したときに受ける感動とは、それが可能であることを信じさせる、人間の精神の力を感じとることに他ならないでしょう。そして、それをひそかに自分のものにし得るよろこび、楽しみこそ、芸術以外では味わうことの出来ないよろこびであり、楽しみなのです。

音楽を知的に理解することは、ある場合、極めて危険ですが、私たちのオーケストラが育つためには、それは是非ともなくてはならない、重要な側面を担うに違いありません。

団内誌『新響』('62年12月発行)

まあ結局ね、芸術作品ていうものは、ベートーベンであろうとストラヴィンスキーであろうと、人間の精神の物凄い昂揚の結果ですね。つまり、非常に活発な精神活動の結果生まれるのが芸術作品です。演奏も僕同じだと思うんですね。そこでいい演奏をするっていう事はね、物凄い精神の燃焼ですよ。それが聴いている人の精神を共鳴させるというかね……、まあ今の世の中不況で厳しくて、なかなか給料も上がらないし、生活も楽じゃないし、もう楽しく生きていく望みも半分位は諦めて、半ば惰性の様に生きていく……、ということは精神が眠っているというか、死んだ様な精神を持った人でも、素晴らしい芸術に触れ、いい演奏を聴いているうちに、眠っていた自分の精神も少しずつガラガラ廻り出してね、人間らしい精神が沸き立ってくる。そういう状態を僕は芸術的な感動と呼べると思うんですね。つまり、自分が置かれている環境というものを押破ってもっといい環境を作っていこうという所に、人間らしい生き甲斐が生まれてくると思うんですが、動物たちは、方々駆けずり廻って温かい所を見つけてそこで寝ちゃうんですが、人間っていう生物は、昔だったら火を起こす方法を考え出したり、あるいは、壁を厚くする良い材料はないかしらんと思って一生懸命考えたり、これは環境とか自然に対する戦いですけれど、そういう戦いを挑んで人間は文化を築いてきたし、これは敗けられないんだっていう、それが人間の生き甲斐だと思うんですね。ですからその環境っていうものは、自然であろうと、政治であろうと、経済であろうと、何と置き換えてもいいわけで、だから環境が厳しい時に、その厳しさに敗けて死んだ様に生きていくんじゃなくて、それと戦いながら人間らしく生きていくっていう、それが芸術につながってくると思います。

いい芸術に触れて感動を覚えるっていうのは、自分の精神が沸き立ってきて、よし、オレも負けちゃいられないんだなと、オレも一つ頑張ればやれんだなと、まあ言葉にすれば少しおかしくなりますけれども、それを自分一人の中でこうホクホクと温めながらね、楽しみながらそういう気分が味わえるっていうのはね、僕はね、素晴らしい芸術だけが持ってる、あの独特の喜びであり楽しみであって、まあこの世にはいろんな種類の喜びや楽しみがありますけれども、それはもう独特な味わいだと思うんです。

第29回定期演奏会「ストラヴィンスキー三部作」プログラム('75)
音楽評論家　向坂正久氏との対談より

音楽はすべての人々のものです。そしてすべての人々は、そのよろこびを手にする権利があります。音楽はまた、人の心と心とを結びつけるものです。だからこそ、音楽の価値は、その外観や技術の高さによって計れるものではなく、いかに人と人とを結びつけたかにあるのです。たとえどんなに素朴な外観をしていようとも、人の心をとらえる音楽こそ、価値高き大音楽というべきでしょう。

それを自分の身体で実感しつつ生活できることは、音楽に生きる者にとって、どれほど大きなしあわせかわかりません。また団員みんながはっきりとその意味をつかみとっている限り、新響はどこまでも伸びてゆくでしょう。この世に音楽のある限り――。

第7回定期演奏会プログラム('65)

作曲家への想い

独特の解釈をもってロシアの作曲家の作品に積極的に取り組まれたのも、楽団創立二十周年を機に「日本の交響作品展」を始めようと提案されたのも、芥川先生でした。それは作る側の立場からの作者や作品に対する深い愛情と理解があったからでした。その想いが弾き手にも、聞き手にも、伝播し、新響にとってロシアものと邦人作品は重要なレパートリーになったのです。

殊に、十回を重ねた「日本の交響作品展」を通し、作曲家自身から話を聞きながら練習をする、或いは自分達でスコアから写譜をしパート譜を作る、といった事を体験し、又、充

分な練習期間に作品への理解と愛着が湧き、邦人の作品を演奏する事に喜びを感じるようになったことは、かけがえのない財産となり、中国作品展や細川作品の委嘱初演の原動力となりました。

指揮者のメンゲルベルクは、この交響曲を作曲中のチャイコフスキーをたずねて、その演奏法について教えを受けたという。

私は昨年、ある放送局のライブラリーでこのメンゲルベルクの録音を見つけ、全くそれをコピーした演奏会（注：新交響楽団第85回演奏会）を開いた。それを聞いた多くの批評家たちは、こんなヘンな〈悲愴〉は初めて聞いた、と言う。しかし私には、これほど自然な〈悲愴〉は他にないと思っているし、チャイコフスキー自身も、こんな演奏を望んでいたに違いない、と信じている。

日ソ協会発行『日本とソビエト』('79)

私は何度かショスタコヴィッチとモスクワで会った。もう数十年も前のことだから、記憶も薄れがちである。しかし、そのぼやっとした記憶の中で、忘れられない鮮烈なものもいくつかはある。

なんと言っても、通訳をはさんで一対一で初めておめにかかったときのことは、まだ昨日のことのような気がする。こちらは学校を出たての青二才、あちらは世界中で一番有名な作曲家の一人である。私は大分あがって、つまらぬ質問を矢つぎばやに浴びせかけたことを覚えている。

『いわゆるジュダノフ批判について、われわれの間にはいろんな議論がありますが。』

『われわれの間の批判は同志的なものですから、もし批判を恐れる人がいたら、それは臆病というより他はないでしょう。重苦しい音楽ばかり出来たら、聞く方はたまらないでしょう。これから私も、面白くて軽い音楽もたくさん書こうと思っています。』

『好きな外国作品は？』

『レスピーギのローマの泉、ミヨーのフランス組曲、ガーシュウィンのポギーとベス、それから好きな作曲家はイギリスのブリテン……』

彼はいつも吸い口の長いロシア製のパピロスを口にくわえて、忙しそうに煙を吐き出していたし、新しいのを口にくわえると、けいれんするような手つきで、慌ただしくあっちのポケット、こっちのポケットとマッチ箱を探す。その神経質そうな姿を見ていると、彼がフットボールのジャッジの資格を持っているという有名な話は殆ど信じられなかった。

それから30年の年月が流れ、彼はすでにこの世から去った。

今日本で、はじめて音になる『4番』のスコアを前にして、数十年前の思い出は、様々な屈折をともなって、スコアの奥から陽炎のごとくに立ち上る。その感慨や無量、というほかはない。

第111回演奏会　交響曲第4番日本初演のプログラム('86)

早坂文雄さんは、いつも優しかった。ぼくと視線があったとき、早坂さんの眼は、黒いロイド眼鏡の奥で、いつも優しく微笑んでいた。

ピアノの前では、少し背中を丸めて、楽譜を見る、というよりも、中をのぞき込むような格好をして弾いていた。そして屢々、話をしている時の、優しい早坂さんとはまるで違って、とても激しく、荒々しく、鍵盤を叩いた。

愛してやまなかった、李朝の壺、玉露、堀辰雄……。

作品展を前にして、スコアを見ていると、音楽の向こうから、そんなさまざまな想い出が、激しく蘇ってきて、困惑してしまう。

第83回演奏会「日本の交響作品展3　早坂文雄」プログラム('79)

ひとつひとつの音が、鋭く空間を削りとっていくように、出来るかぎり生々しく、そして烈しく、あの特有な魅力に満ちた伊福部作品の世界を、造形していくことが出来たら——それが今の、私たちの希いなのです。

第87回演奏会「日本の交響作品展4　伊福部昭」プログラム('80)

清瀬保二の名は、永く残るだろう。交響作品はほとんど識られていないが、どの曲にも、頑固なまでに自己の世界を確立したいという、執念の炎が燃えていて、見事という他はない。

第95回演奏会「日本の交響作品展6　清瀬保二」プログラム('82)

「日本の土の匂いを伝える作曲家」小山清茂はよくそう言われる。彼は、わが国の民族音楽の旋律やリズムを、自作の素材として大胆に使うので、そう言われるのも無理はないが、私は、彼の音楽が人に訴えかけてくるのは、「土の匂い」とはあい容れない、近代の音楽的造形とそれとの葛藤の方にあるように思う。「土の匂い」は彼の音楽にとっての、しぶ皮のようなものではないか。

私は是非とも、その中身をかいでみたいと思う。

第106回演奏会「日本の交響作品展9　小山清茂」プログラム('85)

単に青春と言えば、それはおそらく、心の問題であろう。50歳の青春、60歳の青春もないとは言えない。

しかし、作曲家にとって青春——と言えば、それは丁度、人生における青春時代と同じく、再びかえることのない、貴重な、若き日々における創作生活を指すことになろう。

その時代の作品は、それから後の作曲家本人を、逆に創っていくことになる。

第99回演奏会「日本の交響作品展7　青春の作曲家たち」プログラム('83)

私は民族の香りがたちこめている、ファリャの音楽が大好きです。

第119回演奏会「マヌエル・デ・ファリャ」プログラム・初校('88)

もしも音楽のなかに血液が流れているとしたらこれほど純粋な血液はないだろう。
マヌエル・デ・ファリャ！　同上・再校

アマチュアオーケストラの社会的意義について

アマチュアオーケストラは、ただメンバーの楽しみを満足させる、ということのためだけにあるのではない——音楽を通して、素晴らしい演奏を通して、社会的にも、又、音楽の世界でも、影響力も持ちうる、ということを自覚し、その意味を考えなければならない。

何時の時代にも芥川先生が、口を酸っぱくしていわれ続けたことでした。日々の練習の手配や演奏会の仕切り、そして各自がさらうことだけで手一杯になってしまう団員は、先生と共にサントリー音楽賞を受けたことで、先生の言葉の意味の何分の一かを、本当に身に滲みて理解しました。

まず一番最初に現れたのは、〈たとえどんなに下手であっても、どんどん職場の中に入って、できるだけたくさんの人に聞いてもらうべきだ。行動を起こさなくては、苦労して練習する意味がない〉という意見と、〈ろくな演奏もできないようでは、人にたのしんでもらうわけにはゆかない。まず自分たちで楽しむべきだ〉という意見の対立でした。

これは一概にどちらが間違っているとはいえない問題です。私たちのオーケストラは、そもそも道楽としてではなく、一つの音楽運動として始められたのです。演奏活動ぬきにして考えるなどということは、当然あり得ません。しかし、そうかといって、自分たちさえ楽しめないでどうして他人を楽しませることができるでしょう。この両方の意見には、それぞれ一面の真理があります。結局、この面倒な問題は、最も基礎的なアマチュアオーケストラとして最低の技術的条件を具えるまでは、練習に専念するということで、意見の一致に達したのですが、こういう問題が起こったおかげで、団員たちはあらためて、自分たちはどうあるべきか、について深く考えることができたように思います。

第7回定期演奏会プログラム('65)

ぼくたちはアマチュアですから……〉という言葉はよく聞くけれども、その言葉の裏には、さまざまなニュアンスがひそんでいるように思われる。〈どうせ下手ですよ〉〈楽しむことが第一でね〉〈損得は問題じゃありませんわ〉〈ぼくたち以外のことなんかどうでもいいや〉〈プロに似たようなことはいやだね。けがれたくないからね〉〈……〉etc. etc.

もしも、この言葉が便法として用いられるのであったら、アマチュアの楽しみは、道楽と同じ意味しか持たなくなり、あくまでも個人の生活の範囲を超えることはない。

無論、ぼくはそういう楽しみを否定はしない。道楽としてのコーラス、道楽としてのアンサンブル、道楽としてのオーケストラがあって悪いはずはない。しかし、その楽しみは、決して集団の楽しみとはならないだろう。その楽しみをみんなのものにするためには一つの共通した目的意識を持つことだ。つまりイデェを持つことだが、これは音楽における一つの運動に他ならない。自分の楽しみが同時に他人の楽しみになる……簡単にいえば、運動の楽しみとは、こういう性質のものであろう。

第8回定期演奏会プログラム('65)

私は今まで、新響を一つの運動体として考えてきました。アマチュアの音楽団体は、とかく、道楽者の集団のように思われ勝ちですが、新響は決してそうであってはならないと考えてきましたし、今もそう思っております。

新響の連中は、すでに音楽するよろこびを知っているといいましたが、実はそれだけでは不充分なのです。そのよろこびを少しでもたくさんの人に解ってもらうことを願い、そして解ってもらえた時のよろこびをも知らなければ意味が在りません。そうでなかったらアマチュアオーケストラというものに一体どれほどの社会的価値があるというのでしょう。

プロのオーケストラなら、わずか10カ月か、あるいは10日ほどの短い歴史しか持たなくても、私たちのベートーヴェンよりは、はるかに、うまく演奏するでしょう。しかし、それは私たちにとって、そうたいしたことではありません。私たちにとってもっと大事なことは、何が苦しみに耐えさせ、何がよろこびを運び、何が生き甲斐を感じさせるのかを、この演奏会を通じて深く知り、その意味を確実に摑むことなのです。

新響創立10周年記念ベートーヴェン・チクルス プログラム('66)

もとより、音楽そのものは、プロもアマチュアも区別はなく、ただそこには、感動的な……無感動な……生き生きとした……まるで死んだような……それぞれの音楽があるだけです。

しかし、プロとアマチュアは、当然、それぞれ異なった内容の制約を背負っています。日本人の作品、ことに戦前の作品が、全くといってよいほどプロ・オーケストラによって演奏されないのも、プロにとって〈経済〉は、制約の最たるものであり、馴染みのうすい日本作品は、聴衆を集めにくいからに他なりません。

アマチュアにとっての制約は、おそらく〈技術〉がその最たるものでしょうが、それ以外の点では、プロを凌駕し得るものをたくさん持ちあわせています。

その特質さえ発揮することが出来れば、時には、プロ以上にアマチュアが社会的要請に応え得るということを、鳥井賞受賞は客観的に証明してくれたことになります。これは今日の音楽状況に対する、大きな発言ではないでしょうか。私自身にとっては、苦渋の多かった新響との20年の歳月があっただけに、受賞の感激は、かつて味わったことのない大きなものでした。

鳥井賞受賞記念演奏会プログラム('77)

素晴らしきもの

愛情があるから、好きだから、できる。そうでなかったらあのご多忙の中を先生がかくも多くの時間と労力とを新響の為に費やそうはずがなく、先生こそ、まさにアマチュアが何たるかを身をもって実践されて来たのです。

何回練習しても、上手くいかない早いパッセージはゆっくり練習し、段々にテムポを上げていく。時には指揮台から降りて団員の間を歩き廻りながら指導される。かつてその練習があまりに厳しく、泣いてしまう団員が居たとか……。

今日は最後まで通しましょう、と演奏会直前の練習で言われても、いろいろなことが気になって止めてしまい、結局、一回もその曲を通さず本番を迎えてしまったり……。

団員の子供が練習中に声をだすと、にっこり笑って『待っててね。』そしてみんなに向かって『新響の子は、みんなの子だからね。』……。

そうした先生の姿こそ、まさに音楽を愛してやまない者の姿でした。

楽器を抱えて通勤し、ラッシュの電車にもまれて練習場に集まり、団費を払い、おまけにガンガン頭から怒鳴りつけられても、けっしてそれをやめようとしなかった団員たち——彼等の心を占めていたものは、ごく平凡ないい方ですが、音楽するよろこび、音楽を創り出す楽しみ以外の何ものでもなかったのです。損得勘定からいったら、世の中にこれほど馬鹿馬鹿しい話はないかもしれません。ただそこには、純粋な音楽への憧れがあるばかりだったのです。

いつも不平不満を並べたて、悪口雑言をわめきちらしながら、私が10年間も新響とつきあってしまったのは、ただ、ただ、彼等のこの音楽する心にひかれたのだと思います。少し変ないい方ですが、それを愛してしまったのでしょう。

新響創立10周年記念ベートーヴェン・チクルス プログラム('66)

広い世界には、一見美しくても内容の空虚なもの、ただただ醜悪なもの、魅力はあっても刃のように冷たいもの、暖かくはあっても魅力に欠けるものなど、さまざまな風景がみられますが、私はアマチュアの諸君がひたむきに音楽を求める姿は、内容の充実したもっとも美しいものの一つだと固く信じています。

そしてそれは、まさしく音楽世界の中心に位するものだと思っています。

第29回定期演奏会「ストラヴィンスキー三部作」プログラム('75)

音楽はみんなのもの——アマチュアこそ音楽の本道であることへの確信は、27年前も今も少しも変わりはない。新響はこれからも、ずっと生き続けるであろう。この世に音楽のよろこびある限り——。

第100回演奏会プログラム('83)

Webster 大辞典によると、"Amateur" の第一義には "Love" とある。まさに愛してやまぬ、これこそアマチュアの心であろう。

辞書にこだわるようだが、新村出の"広辞苑"で"愛"をひくと、"なさけをかけること。かわいがること。何ものかにひきずられる感じ。また、或る物事に没頭する快感。"などとあり、金田一京助の"国語辞典"には"1・イ．いつくしむ。かわいがる。ロ．したしむ。ハ．好む。2・おしむ。イ．大切にして手離さない。ロ．物惜しみする。3・異性や物をむさぼり求めること。〔仏〕"などとある。

これらの字意は、あたまに音楽を、音楽に対して、等の言葉をつければ、いずれもアマチュア音楽家の気持ちを言いあてているように思うが、とりわけ、何ものかにひきつけられる感じ、或る物事に没頭する快感、はそのものズバリの表現ではないだろうか。要するに代償を求めず、ただひたすら音楽を愛し、それに没入していく心、それがアマチュアの中味であり、魂であろう。

私はいつも、アマチュアを「素晴らしきもの」の代名詞にしたい位に思っている。ただひたすらに愛することの出来る人たち、それが素晴らしくないはずがない。私がいつも、新交響楽団の肩書に、小さくアマチュア・オーケストラといれるように頼んでいるのは、それを忘れないようにするために、そして、大勢の方々にそれを分かって頂きたいためにである。

第113回演奏会「日本の交響作品展10 新響と三十年 芥川也寸志」プログラム('86)

誇りをもって

まず実現したいことをはっきりさせること、そしてその為に必要な手段を考えていこう。最初からこれは出来ない、あれは無理だ、と諦めていては進歩がない。自分たちの活動を広げていくためには、アマチュアとして、ひとつの団体として、誇りをもってヴィジョンを描くべきだ、ともいわれました。

中国作品展の準備にあたり、中国から作曲家や演奏家を招聘するには、通常の団の運営費ではまかないきれず、補助金を申請することになりました。係りになった団員が申請資料を作り、先生にお目に掛けると、全部目を通された後、申請金額を二倍に訂正されました。

『こういう所に、自分たちはアマチュアだから、といういじけた気持ちが出るんだよ。必要なものを助けてもらうのだから、ちゃんと書きなさいよ。』

その形態においては、全くプロと同じでありながら、尚、燦然として光り輝いてこそ、アマチュアリズムの名にふさわしいのではないだろうか。この僕の意見は、屢々大きな誤解をもって迎えられたが、新交響楽団とともに歩いたこの数年間は、ぼくにますますその確信を抱かせた。

今の日本で、アマチュアの果たす文化的、音楽的役割は計りしれぬほど大きい。〈ぼくたちはアマチュアですから〉が、もっと自然で、もっと明るく、もっと楽しそうに、もっと誇りに満ちた口調で語られることをぼくは期待する。

第8回定期演奏会プログラム('65)

世間では一般的にアマチュアといえば下手なもの、駄目なもの、その反対にプロといえば上手なもの、いいもの、という風に思われています。ですから音楽といえば、それは大部分プロの音楽を意味し、アマチュアの音楽はそれの真似事、というように受けとめられております。

つまり、プロが音楽を提供する普通のものであり、アマチュアは、特種なそれに似たもの、という訳です。これはどうも、私には納得がいきません。

アマチュアというものこそ、ごく自然に音楽を楽しみ、味わい、その楽しみやよろこびをお互いに分ちあい、提供する側であろうとされる側であろうと、それはごく当たり前な存在であります。

ところがプロとなると、誰でもおいそれと簡単になれる訳ではなく、普通の人とは違う特別な技術なり、特種な才覚の持主たちなのですから、これは特別な、特種な存在です。

アマチュア普通、プロ特別、これが自然なものの見方というものでしょう。

一方アマチュアの方でも、自分たちが主体的な存在であることを忘れて、プロの真似事に明け暮れる傾向が顕著です。

アマチュアにとって、プロの技術を目標にして必死に向上しようと努めることは非常に大切ではありますが、アマチュアが、プロにはない自分たちの主体性なり、そのよさなり誇りなりを忘れてしまったら、それは本当に空しい存在でしかありません。

主権在民というといやに大げさですが、ごく少数の特別人に、大多数の普通人の音楽的要求を無視したり、束縛したりする権利ないように思います。普通人は普通人として、特別人は特別人として、当たり前にそれぞれの権利を主張すべきなのです。

いつも、私はプロなんですから……という枕言葉でものを喋る音楽家には、たいていろくな人はおりません。こういう場合、プロという言葉は何か都合の悪いものへの〈かくれみの〉なのです。

しかしもっと多いのは、……どうせ私たちはアマチュアですから、という結び文句を使うアマチュアたちです。この場合も、まずくて当たり前、という言い逃れのために、ことさら低級で悪いものであるかのように使うのです。

日本の交響作品展プログラム('76)

今こそアマチュアの誇りを高くかかげて、自分たちの音楽のすばらしさを問うべきだと私は思うのです。スポーツの世界ではたとえば高校野球ですが、平凡なサードゴロを打って99.9%死ぬとわかっていても必死になって一塁にかけこむ、そこに一種のさわやかさがあり、それがみんなの心を打つ。我々のアマチュア・オーケストラの場合も、練習して練習して積み上げて音楽を作っていくよろこびはプロの世界にはない全く別種のよろこびであり、それを聞き手に伝え得たときのすばらしさは、プロのすばらしさとは全く違ったものだと思うのです。自分たちは人を感動させる、人の心をつかむ、うまいへたは問題ではなく、人の心をつかみ感動に巻きこむことができるということを忘れて、アマチュアというのはへたであたりまえ、どうせアマチュアなのだからというのでは、パス（回数券）を持っていながらそれを忘れて、お金を出して切符を買って電車に乗っているようなものです。

アマチュア・オーケストラ連盟シンポジュウムでの発言('84)

残された注文

団ができてから、三十余年。芥川先生は多くの注文を出してこられましたが、その中で新響が応えられたのは、どれ程だったでしょうか。

いままでは、例えそれが遅々とした歩みではあっても、先生とともに確実に進むことができました。

しかし、残された注文は沢山あります。今後、新響が先生亡きあとどうやって進んでいくのか——そのことを考えるときに、この残された注文にどう応えていくかを考えることが大きな手掛かりになるに違いありません。

ぼくはアマチュア音楽について考えるとき、スポーツの世界を想い起こす。ハード・トレーニングによって自己を鍛えなければ、よい成績をおさめ得ないという点では、音楽もスポーツも同じことである。栄光は常に苦難の末にあるものだ。

それにもかかわらず、いつもアマチュア音楽が甘っちょろい線を低迷し、道楽者扱いされ、おのれ自身にもきびしくなれないのは、スポーツにおける記録、つまり勝負がないからではないか。負ければ誰だってくやしいし勝負ある限り勝たねばならぬし、そこに自然と苦難に耐え、おのれを鍛え抜く心がまえが生まれてくる。

ところが音楽ではそうはいかない。新響の諸君にしたって、自分自身に甘ったれている。アマチュア精神の発揮などと、口先だけでいくら叫んでみたところで、これでは話にもなるまい。

新響が、プロのオケにはないアマチュアらしい素晴らしい響——文字通り新しい響きをうち鳴らすためには、おのれ自身に対する練習がどうしても必要だと思う。たとえ、時計の

文字盤に刻み込まれるような記録はなくても、団員一人一人の心の中には、おのれ自身に対する記録への挑戦という精神がなければ、本当のアマチュアリズムは生まれないだろう。

しかしこれとて、指揮者が如何に口先で精神昂揚を叫んでみたところで、一国の総理が国会で愛国心や国防意識の昂揚を叫ぶのに似て、ただ空しい響きを残すのみであろう。それは、おのずからみんなの中に湧きあがってくる性質のものであり、いろいろな形の愛国心があるように、いろいろな形の記録と、それへの挑戦があり、それらが自由に、個性的に、しかもお互いに刺激しあって発揮されていくような条件が必須のものであろう。

難しいことだが、もしこの条件が満たされたとき、新響はおそるべき偉力を発揮すること、まずうけあいである。ぼくはその日の一日もはやからんことを希う。今、取り組んでいる曲が〈幻想〉ではあっても、これが幻想におわるようでは新響もおしまいである。アマチュアの音楽には、独特の迫力と、独特の魅力のあることを、断じて忘れないでほしいと思う。

第16回定期演奏会プログラム('68)

一つの夢は、また別な夢を呼び起こします。苦楽を共にしながら、勤務の都合や名という制限のために、今度の旅行（訪ソ演奏旅行）に加われない人たちがいるということが、是非とも全員で行けるようになりたいという夢を抱かせます。もっともっと、いいオーケストラになっていい演奏を聞いてもらいたいという夢、もっとたくさんのレパートリーを持つという夢、毎月定期演奏会を持てるという夢、いつでもすばらしい客演指揮者を迎えられるという夢、アマチュア団体と提携してオペラやバレエの公演ができるようになるという夢、あとからあとから、夢はふくらむばかりです。

訪ソ記念特別演奏会プログラム('67)

それはみんな音楽が好きで、弾いて楽しむっていうことは基本としては否定はできませんけれども、ただそういう自分が余暇を楽しむっていうことだけじゃなくて、やっぱりやる以上は、感動的な音楽をね、聴衆に提供しうる演奏団体にならなきゃいけないんで、ですからそういう意味で新響は、十年前に比べれば大分旨くなったと思いますけれど、まだまだ道は遠いわけですね。だから、その遠い道のりをいつも歩いて行くっていう、そういう態度なり精神なりがなけりゃいけないし、それも捨てたらもうそりゃとたんに堕落し始めると思いますね……。

……だから僕は新響のメンバーに標準的な音楽になっちゃったら絶対いかんと言っている。標準っていうものはありますよ、つまりベートーベンならこういうふうに弾くのが標準であるとかね、ストラヴィンスキーは大体こうやることになっているとかね。で、そういう標準に陥ったら絶対駄目だと思うんですね。それは幻を追っていることになるんですよ。本当の音楽っていうのはね、何て言ったらいいか……。こういう言い方をするとまた難しいって言われるかもしれないんだけれどね。

例え話で言えば、殆ど摑まえることの不可能な完全犯罪者みたいなものだと思うんですよ、音楽そのものというものは。つまり証拠物件が沢山そこにあって、それをたどっていけば摑まえられるっていうんだったらね、音楽は盛んにならないと思いますね。……演奏という行為についても、やっぱり同じです。音楽に迫れば迫るほど、それは名演奏です。だから標準っていうのはね、そういうことを意味しないわけですよ。標準ていうのはね犯人を摑まえる時には、大体こういう方法でやるんですよっていうことを、講習受けているようなもんですよ。そうじゃなくてね、標準なんかからどんなに遠くっても、音楽に肉薄する精神がなかったら駄目だと思うんですね。

第29回定期演奏会「ストラヴィンスキー三部作」プログラム('75)
音楽評論家　向坂正久氏との対談より

その意味を全うするためには、まず、たとえアマチュアであっても〈どうせ下手ですよ……〉という意識を捨てなければなるまい。下手でいいのではなく、やはり、断じてうまくなくてはいけない——あるいは、うまくならなくてはいけない——あるいは、うまくなろうとしなくてはいけない。

音楽の価値はうまいかまずいかではきまらない、というのはぼくの持論でもあり、アマチュア音楽の意義を強調する場合のきまり文句でもあるわけだが、それでも尚、うまいかまずいかは、依然として、音楽の価値を決める有力な尺度であることは、周知の如く厳然たる事実である。

また、楽しむことも必要には違いないが、苦しみを恐れていては運動の壁をつき破ることは極めて困難だ。たとえば一つのアンサンブルの中で、技術的に巧拙の差が大きくなりすぎた場合、思想的な対立が起きた場合、外的制約が大きくなった場合、その他に、大きな壁がみんなの前に立ちふさがる。その壁をのり越えることは、実際生やさしいことではない。しかし、その障害を突破したとき、はじめてアンサンブルのよろこびや楽しみは、運動の実感とともにみんなのものとなるだろう。

第8回定期演奏会プログラム('65)

これからも新交響楽団は、今と同じように美しく、愛に満ちあふれた素晴らしい存在であってほしい。
新交響楽団よ、永久に栄光あれ！

第113回演奏会「日本の交響作品展10 新響と三十年 芥川也寸志」プログラム('86)

（編集・樋口のぞみ）

芥川也寸志と新交響楽団
——オーケストラの声

カニカマボコのこと

練習の時１番クラの代役を緊張して吹いていると、「キミ、ホンモノ？」と芥川氏がきく。「いえ、ニセモノです」と私が答える。「ウマイじゃない、本番も吹いたら？」と芥川氏。思わず口許がゆるみそうになるのをぎゅっとへの字に結ぶ。

「ホラ、最近あるでしょ、ホンモノそっくりなカニの足みたいなカマボコ。ちょっと食べてもわからない…」

それ以来、スーパーの棚に「カニモドキ」を見かけるたびに芥川さんを思いだす。

芥川さんはカニがお好きだったのでしょうか。

（Cl. 末村洋子　1980年入団）

プロになりそこなったアマチュアでなく…

今から15年ほど前、新響に入団した私は、当時大学で音楽を専攻していて、将来は音楽方面の仕事（要するにプロというのでしょうか）につくだろうと漠然と思っていました。ところが新響には、そんなことを言うのが恥ずかしい程、音楽とは無関係の職業を持ちつつ、上手で、なおかつ本当に音楽を愛し、楽しんでいる人たちが大勢いました。そこで私は芥川先生のアマチュア論に出会ったのです。「音楽はみんなのもの」「アマチュアは代償を求めず、ただひたすら音楽を愛する」「どうせ私はアマチュアですからと、自分を卑下するな」等々、先生のおっしゃる言葉の一つ一つに納得し、私の道はこれだ！と思いました。今私は「プロになりそこなったアマチュア」ではなく、胸をはって「誰よりも音楽を愛している私たちアマチュア」と言うことができます。私の人生の指針を与えてくださった芥川先生に感謝し、これからも練習にはげみたいと思っています。（Fl. 新井純子　1975年入団）

子供・高校野球・貴ノ花

子供達を大好きだった先生が、音楽教室で出題されたかわいらしいクイズをご紹介しましょう。

①お味噌の中に入っているものはなーに？

②空の上には何がある？

（「ドレミファソラシド」から、答えは①ファと②シ）

高校野球と貴ノ花の大ファンでした。いつも新響に求めていた「アマチュアらしいひたむきさ」「弛まぬ練習」の典型なのです。

当然のことながら名文家でしたが、句読点や文節への気配りを演奏にも求められました。「フレーズの変わり目を無視するのは、階段をトコトコ降りてきて、そのままの速さでスタスタスタと歩き出すようなもの」とか「君のアーティキュレーションは『誰もが／見ていただきたい／女性映画の決定版』と区切るべきところを『誰もが見ていた／抱きたい女／性映画の決定版』と読んでしまうようなものだ」といった名言を残されました。

嫌いだったものは―梅干しと、パーティでの女性のブーツ姿。

やさしく、無邪気で、情熱とユーモアを持ち、礼儀を大切にされた先生でした。（コンサートマスター・都河和彦　1968年入団）

新響は「今」をつくっている

「新響」。この言葉の中にすでに、何か特別の響きが感じられる。それは、現在の日本で、オーケストラの役割がとかく西洋音楽の紹介、過去の作品の紹介にあるとみなされがちな中、「新響」は、「今」を創っていると自負できるオーケストラだからである。これは、言うまでもなく、芥川先生の独創性と強い意志、アマチュアを愛する優しい心から生まれたものである。あえて先生が「新響」と命名された意味が今になってよく分かる。

これからもコンテンポラリーなオーケストラであり続けたい。（Perc. 田中　司　1966年入団）

銀座をサンドイッチマンしたら？

ショスタコーヴィチの４番の合宿の時、休憩時間に芝生の上で先生に（本邦初演なので）世の中に今度の演奏会のことを大いに知らせたいものだ、というようなことを言ったら、「銀座をサンドイッチマンでもしたら」とのお答え。ガクッ。

その一方、伊福部先生の「ラプソディ」（冒頭に長ーいヴィオラのソロがある）の時は、当日のステージ練習のあとで呼ばれて、本番の時は演奏が終わったら指揮台の前まで出ておじぎをしなさい、とのお言葉。単純だからすっかりやる気になってしまう。人の心をつかむのもうまい先生でしたね。

先生もぼくらも非常に楽しみにしていたショスタコーヴィチ交響曲シリーズを開始する直前だったのに…。何としても残念で仕方がない。（Va. 柳澤秀悟　1975年入団）

30年間で印象に残った芥川先生の言葉

良いプロ・悪いプロ

＊悪いプロ　「オレは○○音楽大学出身だ。○○交響楽団員だ」と言って、アマチュアオーケストラのエキストラに来て、ぶっつけ本番で出る。自分が弾けなくても、どうせアマチュアの付き合いだ！と言う人。

＊良いプロ　N響のＹさんは慶大出身。「かつては皆様と同じアマチュア音楽家でした。ここで吹いていると青春時代を思い出します。いつも皆様は演奏に打ち込んでいるので…きっと仕事も一生懸命やっているのでしょう」

作品に対してのイメージ

＊モーツァルトの上昇スケールは階段を昇るように、一つずつ弾くと音楽がはっきりと生き生きするのだ。

＊ベートーヴェンの第７交響曲の第４楽章（104―110小節）の一部は、リズムもハーモニーもまったく同じ形が続いているね！　ただ弾いていてはつまらないが、sfz（アクセント）がついている。ここで彼は長い髪を振り乱し、力いっぱい

sfz を楽しんでいたのだろう。

＊ワーグナーの音楽はくどいね！　特にトリスタンとイゾルデの「愛の死」の場面は…。やっぱり彼はホモだったのかな…普通の人から見れば、異常にしつこい。そうだ、チャイコフスキーはどうして死んだのか君達は知っていますか？

個人的な会話

＊四国演奏旅行中、僕は汽車の中でビン入りのミルク・コーヒーを飲んでいた。「先生！これすごくおいしいですよ」と言ったら、「そんなのがうまいなんて言ったらカラヤンに笑われるよ…。」

＊「石川君！　ストコフスキーはここでどういう風に指揮をしたのかね！　最近のレコードはどれを聴いても個性がなくてつまらない。トスカニーニやフルトヴェングラーの時代は始めの１、２分聴けばわかるほど強烈な個性の音楽家で聴くのが楽しみだった。特にウィンナ・ワルツはエーリッヒ・クライバーが一番だ。」

僕は演奏会のたびに昔の良き時代の SP をテープに録音してコッソリと先生に渡していました。

先生のいやがる演奏

＊「曲想がまとまっていても、幅の狭い、やや情感の乏しい演奏。これを事務的演奏というのだ。つまりソロバンで計算しているようなもの。」　（Vc. 石川嘉一　1962年入団）

子守歌、ソ連、中国のことなど

図書館で楽譜の整理の仕事をしていた頃、芥川先生の曲もいくつか手にする機会があった。それらはオーケストラの曲ではなく、子供のためのピアノ曲や歌曲だった。新響で芥川先生の曲と言うと、あの土俗的なリズムやしつこいまでのオスティナートを思い浮べるが、先生の別の一面を表しているのが、子供のための多くの作品だと思う。有名な「ぶらんこ」や、トリプティークの２楽章の子守歌には、先生の子供に対する深い愛情がにじみ出ている。演奏会の後の打上げの席で団員の子供を見つけると、いつもの厳しい表情が一転して優しい笑顔に変わられたものだ。

打上げではよく、ソ連や中国の話をされていた。新響ではショスタコーヴィチをはじめ、チャイコフスキー、ストラヴィンスキーなどロシアの音楽家の作品を、数多く指揮された。先生の作品にもそれらロシア音楽の影響が強くみられる。だいぶ昔に新響とソビエトに演奏旅行に行かれた程、先生と彼地との関係は深い。また先生は、中国の音楽家との交流も盛んに行なわれていた。新響で中国作品展をやった時も、わざわざ上海から作曲家とソリストを招き、団員と親しく音楽作りをしたのはまだ記憶に新しい。現在の東欧や中国の一連の動きを思う時、先生が生きておられたらどんな感想を持たれただろうと考えると、ある種の感慨を禁じ得ない。

このところノーブレス・オブリージュ（noblesse oblige ＝高い身分に伴う義務）という言葉がずっと気になっている。先日読んだある人の解釈によれば、「エリートが尊敬されるのは他の人より優れたものを持っているからではなく、その優れた資質や地位を活用して、それらを持っていない人を体を張って守るからだ」ということである。芥川先生の生きかたを思う時、この言葉がどうしても重なってみえる。音楽を通じてソ連や中国との国際交流に尽くされたこと、日本の音楽著作権運動の先頭に立って活躍されたこと、子供のために優れた音楽をつくること、また新響をはじめアマチュア演奏家の育成に心を砕かれたことなど、数え上げたらきりがない。

新響との30年を越える関係の間には、団員と意見が衝突したり必ずしも順調な場面ばかりではなかったが、それにしても私たちが先生から受け取ったものの重さは余りにも重たい。先生の曲を演奏しながら、その重さをどれだけ次の人達に伝えられるだろうか、という思いが頭の中から離れない。

新響に入って10年以上たつが、練習でも合宿でも芥川先生は近寄りがたく、個人的にお話しした事はほとんどない。それが先生が入院された時と一時退院された時、我が家に直接電話が入った。それは新響の役員をしている夫宛てのものだったが、２回とも夫は不在だったので私がお話を伺った。練習時の厳しい口調とはうって変わってとても丁寧で、どちらかというと弱々しいお話しぶりだった。その時はまさかと思ったが、亡くなられた時その声を思い出して、涙がとまらなかった。　（Va. 門倉百合子　1977年入団）

雨乞いをする人

芥川さんは、師匠である伊福部さんのタプカーラ交響曲を指揮するとき、いつも泣いているんだよ、とある団員に言われたときはショックだった。近眼でそこまで見えなかった私の不覚、メガネのレンズを換えねば、と思った。

芥川さんの曲はやさしい。マーラーが狂気のように軋む音楽の合間にこのうえもなくやさしい音楽を書いたように、芥川さんはやさしいものへの限りない憧れを音にした。

文化会館の廊下の出合い頭、不意に団員が挨拶しても厳しい表情に、はにかみをうつ向けてしまう芥川さんは、テレビでおなじみの芥川さんではなかった。新響に新しく入ってくる人で、テレビと違う、と思った人は多いかもしれない。テレビで笑顔を見せたぶん、新響に来ると厳しい表情になったのかもしれない。

でも、ものごころついて以来ずっと極楽の雲上でにこにこと漂ってきたような人には、何がやさしいのかわからないから、やさしい音楽は創ることができないんではないかな、とも思った。

「恋」という言葉はもとはきっと「乞い」だ。モノの本で調べなくても、絶対そうに決まっている。芥川さんは、いつも「アマチュアとは、愛してやまないことだ」と説き続けてきた。あこがれ、というのは昂じると悲しくなるんだなと、芥川さんの指揮を見ていて思った。われわれに慈雨を降らせたまえ、雨乞いだ。目の前で雨乞いをしている真摯な人の姿を見たら、そりゃあ、片目で見過ごすわけにはいかないではないか。

だから、芥川さんの指揮する伊福部さんの曲は、本当にわ

れわれの音楽だった。作曲者と演奏者との間に国境（ドイツ人に生まれなかったのが100年の不覚！という類のヤツ）やアマ障壁（どうせアマチュアだから…）といった挟雑物がなくて、本当に見通しがいい。互角に曲とわたり合える！　こんな気分を味わわせてくれたのが芥川さんだった。…などと言っているのは、まだまだベートーヴェンをやったときに「所詮ウィーンにはかなわないけどね」というカッコ書きをいまだに私が自分の中にくろぐろと書いているからなのだろうか……。合掌。

（Perc. 今尾恵介　1983年入団）



▲伊福部昭氏の古希記念コンサート。
氏の作品「日本の太鼓」を弟子たちが新響に混じって演奏した。



▲“新響の子供たち”と。いつもの打ち上げ会場「とんかつ武蔵野」で。

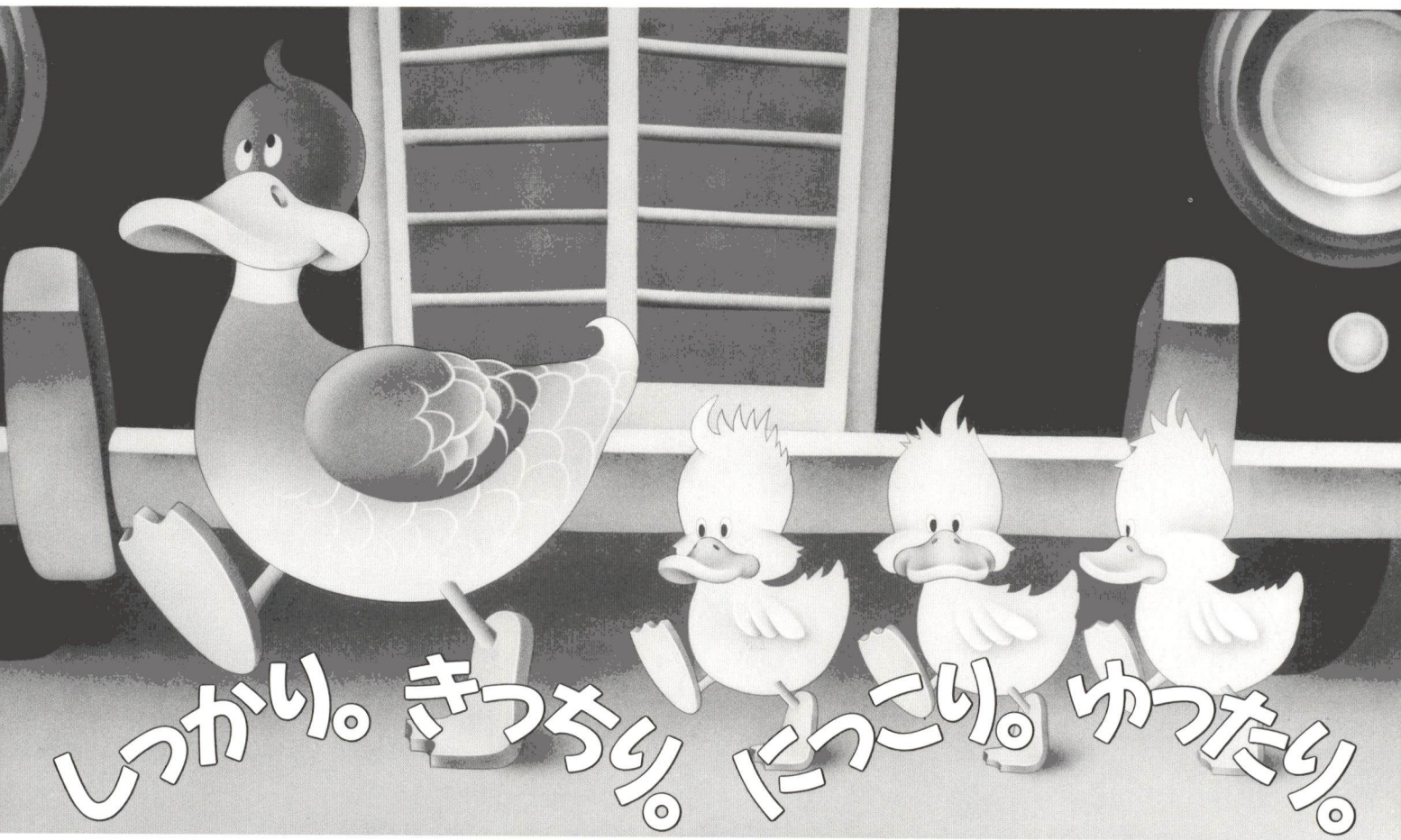


▼菅原明朗作品展。芥川氏の右隣はアコーディオン協奏曲の独奏者・御喜美江さん。





極東証券は、やわらかな発想と
エナジーいっぱいの総合証券です。



Moskowitz © 1990

創立40周年を迎えた極東証券が、総合証券としてスタートしました。
急速に変化する金融・資本市場を**しっかり**とらえ
お客さまのニーズに**きっちり**応え
いつも**にっこり**笑顔を忘れずに
あなたを**ゆったり**した明日へと導こうと、一生懸命ガンバリます。
新しく第一歩を踏み出した極東証券に、どうぞご期待ください。

のびやかマネーステーション

極東証券

本店／東京都中央区日本橋茅場町1丁目4番7号
TEL.03(667)9171(代)

霞が関ビル支店 TEL.03(504)0211
新宿支店 TEL.03(344)3911
日比谷支店 TEL.03(501)6101
新小岩支店 TEL.03(653)5101
北千住支店 TEL.03(888)8251
蒲田支店 TEL.03(732)9111
横浜支店 TEL.045(312)9111
平塚支店 TEL.0463(23)0900
大阪支店 TEL.06(263)1651
名古屋支店 TEL.052(561)9211
亜州有限公司（香港現地法人） TEL.(5) 8683203

「芥川先生と新響のこと」

奥平　一

新響の団員は、芥川先生のことを表立っては「先生」と呼んだ。だが陰では、青春期の子供が父親のことを他人に話す時、「父」というのは照れ臭さ半分で落ち着かず、尊敬と反発する気持を込めて「オヤジ」と言ってしまうのに似て、「芥川さん」とか「アーさん」とか呼んでいた。

芥川さんと新響の関係は、たとえて言えば「親と子」のようなものだった。それも単なる比喩でなく骨肉に近いものであったように思える。

芥川さんは芸術家としての誇りがたかく、私達にもまるで自分の子供に言い聴かせるように、「誇りをもって生きろ」といつも言っておられた。いったん言いだしたらきかず、たまに私達が、子供にも人格はあるんだっ、とばかり反対の主張をすれば、「だから君たちは甘い」「そんなもんじゃない」と親子喧嘩になったりもした。

新響では怒鳴られていたときの方が多かった気がする。「だめだなぁ～」「なんて下手なんだ」「もっと一生懸命弾かなくちゃあだめだ」。そしてときには沈黙したまま不気嫌な顔。時々テレビで見かけるとびきりの笑顔は何処の人かなと思うくらいだった。

新響への取組が真剣なことと、江戸っ子らしい照れ屋さんのせいか、私達にも多少の良さはあるだろうに、少しも言ってくださらない。

そのくせ、外で私達のことを話される時にはいつも決まって、世の中にこの子達ほど素晴らしいものはないとばかりに言ってくださり、褒められている本人たちは「誇り」が少し足りないものだから顔から火の吹く思いがした。

新響は生まれた時から二十歳を迎えるころまで、芥川さんに徹底したマンツーマンで厳しい躾を受けてきた。「上手くなれ」「道楽心でやるな」と言って、数年おきに、或いは数年掛けての成長目標を与えられてきた。第九、ベートーヴェンチクルス、マーラーの第１番、ストラヴィンスキーの三部作など。そして、「単なる自己満足で終わらせずに、苦労に苦労を重ねて、重ねた苦労よりさらに大きな喜びを得るような活動をしなさい」とも言っておられた。（だけれど、芥川さん自身だって指揮もトレーニングも昔はけっして上手くなくて、それは同時に、自分にも言い聴かせていらしたのにちがいない）

また、音楽の精神的な厳しさや素晴しさだけでなく、別な意味での楽しみ方も教えて頂いた。サマーコンサートに代表される、ミュージカル曲、浪速千栄子さんのナレーションによるピーターと狼、黒柳徹子さんとの白鳥の湖、誰でも知っている小品で組まれたコンサートなど。

人（指揮者）との付合い方に、とってもきびしかった。世の中には素晴しい人が多い。しかし、あなた方が付合うのにふさわしい先輩にのみ接しなさいといって、最初に引合わせてくださったのが近衛秀麿先生であった。でも、その後はなかなか他人との付合いを許してはくださらなかった。新響はちょうど二十周年を過ぎたころから客演指揮者との付合いを始めたが、芥川さんは、演奏会には必ずステージリハーサルの時から姿を見せた。会場内の隅っこにそっと目立たぬように座って、私達の姿を見守っておられた。終わると、きっと誰かにそーっと耳打ちされる。「鼻先で弾かずにもっと懸命になってやらなきゃ」「靴の踵をよく磨いておきなさい。観客席の前列からは一番目に付くんだ」「椅子には浅く腰掛けて」「時計をつけて弾くなんて最低」心配で心配で、だけれどなるべく何気なくという風に。

それから、お金に対する考え方。

ある時、芥川さんからある企画が提案された。運営委員会で当年度の予算に照らし、お金が無いのでとお断りすると、例によって「だから君たちはだめなんだ。考え方が本末転倒。金がないからやれないと考えず、やりたいことが先にあって、次にお金をどう集めるか考えなさい」とおっしゃった。この発想の仕方は、今の新響に生きていて、マーラーの交響曲第８番の公演や細川俊夫先生の「ヒロシマ・レクイエム」委嘱などの活動に結びついている。

芥川さんは練習の時、指揮する手を休めてよく話をされた。今になって、あれは芥川さんの多彩な活動の裏に響くオスティナートだったのではないだろうか、と思う話が二つある。

一つは、「人間とは環境と戦う動物」という話。非常に寒い所の動物たちは方々駆けずり廻って温い所を見つけて寝てしまう。人間という生物は、昔だったら火を起こす方法を考え出したり、あるいは、壁を厚くする良い材料はないかと一生懸命考えたり、環境や自然に対する戦いを挑んで、文明や文化を築いてきた。この環境という言葉を、自然や政治や経済など何に置換えてもいい。環境が厳しい時に、その厳しさに負けて死んだように生きていくのではなく、それと戦いながら人間らしく生きていくということが、最後には芸術の意味にもつながってくる。

二つめは、「人は皆、精神の風車を持っている」という話。人は皆、精神の風車を持っている。風車は人により錆付いていたり、廻りやすかったりもする。芸術作品というものはベートーヴェンであろうと誰であろうと、人間の精神の風車を活発に廻した結果で生まれてくるものだ。演奏家は舞台の上で、作曲家が作曲した時と同じ位に、自分の精神の風車を勢いよく廻すと、聴いている人達の風車も少しずつ少しずつガラガラと廻出して、人間らしい精神が沸立ってくる。そういう状態を芸術的な感動と呼べる。（芥川さんは、最近の指揮者も演奏家も技術は素晴らしいが、そうした感動を与えてくれる人は少ないと言っておられた）

今になって意味づければ、芥川さんが企画した創立二十周年を記念する「日本の交響作品展」は、当時の音楽界のある状況を打ち破ろうとしたものであったし、近年の著作権に関する活動は、作曲家である自分の置かれた社会に対する戦いであったようにも思える。しかも、それらは皆、人の眠った精神の風車を廻そう廻そうとした行動であったのではないだろうか。

その「日本の交響作品展」で第八回サントリー音楽賞を受賞したことは、芥川さんにとって、道楽でない真剣な音楽への取り組みとして続けてきた新響の活動が社会的なものとして認められ、二十年来の苦労がむくわれた思いであり、それ

は受賞の言葉にも見えるとおりである。

この受賞は新響にとっても少なからぬ意味があったと思う。

労音から独立して以来いかなる団体にも属さず、コミュニティーのオーケストラでもない新響の存続基盤は、団員の良い音楽をしたいという共通の気持ちと、良くも悪くも芥川也寸志という才気に溢れる行動的な有名人が率いている、ということにその多くを拠っていた。

しかし、この受賞を契機として新響は恒久的な存続基盤が、社会的に意義ある演奏会企画と音楽に対しての真剣な取り組みがクロスした点にあることに少しずつ気付いていく（ただし、社会的に意義があるという部分は多分に芥川さんに負っていた）。

「日本の交響作品展」は11年間続けられる。この間に、新響は芥川さんに認めていただき山田一雄先生と９年間にわたるマーラーサイクルを行い、まるで子供が少しずつ親離れをするように、年間４回の演奏会を芥川さんと山田先生で二分するようになる。

同時に、青年が偉大な親を一歩離れて見直すかのように、新響は芥川さんの指揮する伊福部作品をはじめとする邦人作品、モーツァルトやチャイコフスキー、ショスタコーヴィッチなどに、円熟と独自性を見出す。

私達にはものめずらしかった中国作品展でもファリャの個展でも、芥川さんの指揮はいきいきとした共感に溢れていた。

新響の団員は皆、芥川さんとの新しい展開を予感していたと思う。そして、まずはショスタコーヴィッチのサイクルを始めようとした矢先に亡くなられてしまったのだ。

芥川さんの指揮が予定されていた1989年４月１日東京文化会館の舞台で、新響は芥川さんの「交響管絃楽のための音楽」の第二楽章を指揮者なしで追悼演奏した。

芥川先生は、お元気なうちから自分の後継者について心配されていた。しかし、こうして振返ってみると、先生は知らず知らずのうちに、新響が自立していけるだけの様々な条件を整えるために手を貸してくださっていたことになる。

今、新響は先生のオスティナートを背景にして、音楽的にも運営的にも自立したオーケストラをめざすことになった。

（Va）



上海音楽庁における「日本音楽の夕べ」。上海交響楽団の幹部の面々と。
左から２人目が新響の「中国作品展」でも取り上げた朱践耳氏、
芥川氏の左隣が伊福部昭氏。



芥川氏の還暦記念パーティーで
団友の故・平岩林氏（元アカデミアミュージック社長）と。
芥川氏の着ている赤いベストは団員の秋山さんのお手製。

三十四年の歩み

松木英作

芥川先生の企画の最大の特長は、その時点での技術的なレベルにおけるオーケストラの実力を判断し、その可能性を追求する点であった。

新響の発足から数年間は基礎的能力を高める為演奏会の回数も少なくし、同じ曲を何回も演奏会で取り上げ、ベートヴェンの第九番を定期演奏会で取り上げるまでに7年を必要とした。

しだいに団の実力が伴ってきてマーラーの第一番「巨人」を取り上げるまでにさらに8年が必要であった。マーラーの一番初めての練習の時、東京文化会館の地下のリハーサル室で、先生がスコアを開かれ、その感激をぽつりともらされたのを今でもあざやかに記憶している。

ストラヴィンスキーのバレエ曲「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」一挙上演の大企画も3年間の準備が必要であった。今でこそ色々なアマチュアオーケストラがストラヴィンスキーの作品を取り上げているが、1975年当時では1曲を取り上げてもなかなかむつかしい程だった。それを一挙3曲上演ということで先生もほんとうに懸命であった。しかし、先生が思われた程マスコミに取り上げられることもなく多少がっかりしておられれたのを思い出す。しかし、このことが翌年の創立20周年記念演奏会における邦人作品展へのステップになったと思う。

現在では日本人の作品が演奏される機会はかなり多くはなったが、1975年当時はいわゆる現代音楽に対するアレルギーが聴衆にもオーケストラのメンバーにもかなりあり、邦人の作品を演奏会で取り上げるチャンス自体が少なかった。先生は日頃より多くの聴衆は現代作品に満足できないことをクラシックでまぎらわせているという考えを述べ、なんとかこの分野で新響がアマチュアの特色を生かしたプログラムができないかと考えられていた。

そこで20周年記念演奏会で、第二次世界大戦前の1933～43年の時期の邦人の作品だけで2日間のプログラムを構成するという、前代未聞の企画をされた。

文学や美術の分野では回顧展や個展という形式で発表されるものがよくあるが、それまで日本の音楽界では考えもつかなかったことであった。先生の手元に音楽学校の学生時代、終戦後の混乱期に手に入れた何冊かのスコアがあったことが幸いした。

スコアからパート譜を作ることは莫大な経費がかかり採算を考えると不可能ともいえるが、何曲かは団員で手分けをして写譜をし、これを乗り超える事ができた。練習を始めてもしばらくはなかなか団員ものってこなく、かなり困難を感じたが、先生はそれらの曲が昔に演奏された時の感動を話されたり、日本人の作品に対する共感を団員に話され、団をひとつにまとめ上げた。その企画と演奏は第8回のサントリー音楽賞を受賞した。受賞が決定した時、先生よりすぐ電話があり、その時の先生の喜びの声ははじめて聞くほど興奮されていた。

それから10年余、新響は毎年1回「日本の交響作品展」と題し色々な方々の作品を取り上げ続けたことは、新響の大きな財産となった。日本の音楽界にとっても大きな刺激となったと自負している。

この様に芥川先生の企画は常に、団の状況を見すえ、また日本の音楽界を見すえ、なにをしなければいけないかといったことを常に考えてこられた結果だったのである。先生は常に「選曲はそのオーケストラの思想の表現である」と言い続けてこられたが、その思想の実践にはいつも、大きな障害ばかりが横たわっていたと思う。

しかし先生はその実現をいつも団の先頭に立って実践された。先生が亡くなられて早や1年がたとうとしている。私達はこの先生の思想の継続をさらにさらにしていかなくてはならないと思っている。

一方、先生の前衛的な思想や企画だけでは新響の発展はなかったと思う。

そこにはすばらしい音楽とその土台となる厳しい練習があった。先生の指揮は専門家の目から見ればすぐれた指揮ではなかったかも知れないが、その枠にとらわれない指揮や、作曲家が感じ、表現したかった気持ちを演奏を通じて聴衆に伝えたいという欲求のすごさは、まるで先生がその作曲家の様になってしまうほどであった。時にはスコアに書いてあることとはまったく正反対なことを指揮される事もあった。

例えば1979年にチャイコフスキーの悲愴交響曲を取り上げた際、最終楽章の最後の部分は、コントラバスが *pppp* のピチカートを演奏するが、先生はそこを *fff* に変えられた。静かに終るところが、最強の音なので聴衆もびっくりしたのではないかと思ったが、先生はチャイコフスキーが生きていればOKだと言うよといってすましたものであった。また、現代の指揮者は類型的で個性がなく、どの演奏も同じ様に聞こえると言われ、大胆な解釈を自由に取り入れられていた。

練習にはよほどのことがない限り毎週必ず出席され、練習の一から完成まで徹底するというやり方であった。

練習が時にはワンパターンにおちいり、先生も団員もなかなか全体像がつかみにくいといったこともあった。しかし、この毎週のつらい、楽しい練習も、「アマチュアオーケストラの常任指揮者は毎回の練習に出て、くりかえしくりかえすことによりオーケストラを育てる」、という確信に支えられていたのであろう。アマチュアだからという甘えには一切妥協されなかったが、演奏会の本番ではあまり細かな指揮はせずに団員の音楽の高まりを引きだすことに最も注意を注がれた。

新響が発足して今年で34年余りになる。そのうち32年余り新響にとってはまさに大黒柱であった。しかし今まで述べた様に先生のアマチュアオーケストラに対する思い、新響に対する思いは永遠である。

(Vn)

活動年表

芥川也寸志先生を、労音アンサンブルに指揮者としてお迎えしてから、亡くなられるまでの33年間、作曲家としての活動や、多くの職務をこなされた上で、新交響楽団とも沢山の活動をされました。こうしてその活動をまとめてみますと、如何に多くのものを私たちに残してくださったか、改めて感じられます。

年月日	演奏会名	曲目	おもな出来事・年度内その他の活動
55.11. 9	労音アンサンブルに芥川也寸志氏を指揮者に迎える		
56. 3. 1	新交響楽団発足(規約発効)		＊ヨーロッパ旅行、帰途立ち寄ったインドで見たエローラ石窟寺院に感銘を受ける
8.25	正式団名決定「東京労音新交響楽団」		
57.11.21	第1回定期演奏会	J.シュトラウス＝ラデツキー行進曲、芸術家の生涯／グリーグ＝オーゼの死／鈴木匡編世界民謡集／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	
58. 9.22	国民文化会議演奏会	モーツァルト41番「ジュピター」、他	＊「三人の会」第3回演奏会(4月2日)
11.12	第2回定期演奏会	モーツァルト＝劇場支配人序曲、アイネ・クライネ・ナハトムジーク、ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」、交響曲第41番「ジュピター」	
59. 5.17	会津労音例会	ベートーヴェン＝エグモント序曲／J.シュトラウス＝ラデツキー行進曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	
5.17	小学生のための音楽教室(会津若松)		
5.18	高校生のための音楽教室(会津若松)		
9.	世界学生平和友好祭音楽祭		
10. 6	モイセーエフ舞踊団との交歓会		
12.6～7	日本のうたごえ祭典		
60. 1.23	上田労音例会	モーツァルト＝劇場支配人序曲／グルック＝アウリスのイフゲニア序曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	＊「三人の会」第4回演奏会(3月27日)
1.24	中学生のための音楽教室(上田)		
5.15	熊谷労音例会	ベートーヴェン＝交響曲第1番／J.シュトラウス＝皇帝円舞曲／イワノフ＝酋長の行列／ポンセ＝エストレリータ／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」	
5.15	中学生のための音楽教室(熊谷)		
11.28	第3回定期演奏会	バッハ＝組曲第3番／モーツァルト＝交響曲第40番	
12.11・12	日本のうたごえ祭典		
61. 4.25	第4回定期演奏会	ビゼー＝アルルの女・第2組曲／メンデルスゾーン＝バイオリン協奏曲／シベリウス＝フィンランディア／ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」	
11. 2	第5回定期演奏会	シューベルト＝交響曲第番8番「未完成」／ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」／チャイコフスキー＝交響曲第5番	
11.19	秩父労音11月例会	同上	
11.19	中学、高校生のための音楽教室(秩父)		
11.22	熱海労音11月例会	同上	
11.22	中学生のための音楽教室(熱海)		
11.23	埼玉大学祭		
11.30	3楽団合同演奏会(日本青年館)		
12.9～10	日本のうたごえ祭典		
62. 1.21	埼玉県立東松山女子高校視聴覚室		
4.24・26・29・30	東京労音4月例会	シベリウス＝フィンランディア・カレリア組曲／モーツァルト＝交響曲第40番／チャイコフスキー＝交響曲第5番	
5.19・20	栃木労音5月例会	同上	
6. 3	伊勢崎合唱団定期演奏会と新響公演		
10.28	全ソ労組文化使節団公演(歓迎出演)		
12.11	日本のうたごえ祭典		
63. 2.24	新交響4楽団第1回合同会兼団内交流演奏会		
3.10・16・18・19	東京労音3月例会	グリンカ＝「ルスランとリュドミラ」序曲／ベートーヴェン＝交響曲第7番／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	
4.10	中部うたごえ祭典		
4.21	両毛労音4月例会	ウェーバー＝「魔弾の射手」序曲／J.シュトラウス＝皇帝円舞曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	
5.25	土浦労音例会		
6.16・17	水戸労音6月例会	同上	
12.16・22・25・26・27	東京労音12月例会	J・S・バッハ～ストコフスキー＝トッカータとフーガ二短調／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	

年月日	演奏会名	曲目	おもな出来事・年度内その他の活動
64. 2.23	新交響4楽団第2回合同総会兼団内交流演奏会		＊NHK・TV ドラマ「赤穂浪士」の音楽
4.25	函館労音例会	グリンカ＝「ルスランとリュドミラ」序曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ブラームス＝交響曲第1番	＊TBS・TV「オーナー」出演
4.26	江差労音例会		
4.27	室蘭労音例会		
4.28	浦河労音例会		
4.29	士別労音例会		
4.30	名寄労音例会		
5.25	第6回定期演奏会	シャブリエ＝狂詩曲スペイン／ラフマニノフ＝ピアノ協奏曲第2番／ブラームス＝交響曲第1番	
8.31	サマー・コンサート	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲皇帝円舞曲／チャイコフスキー＝「白鳥の湖」より／レーウェ＝「マイ・フェア・レディ」より／ロジャース＝「回転木馬」より・「南太平洋」より	
10.19	東京労音(八王子)例会	J.シュトラス＝「こうもり」序曲／シューベルト＝交響音第8番「未完成」／チャイコフスキー＝交響曲第6番「悲愴」	
12.12	日本のうたごえ祭典		
65. 2. 3	第7回定期演奏会	スメタナ＝「売られた花嫁」序曲／ハイドン＝交響曲第94番「驚愕」／チャイコフスキー＝交響曲第6番「悲愴」	
2.14	レコード録音(世田ケ谷区民会館)	チャイコフスキー＝交響曲第6番「悲愴」	
3.28	東京労音(千葉) 3月例会	スメタナ＝「売られた花嫁」序曲／ハイドン＝交響曲第94番「驚愕」／ベートーヴェン＝交響曲第3番「英雄」	
4.10・14・18	東京労音4月例会	同上	
4.22・23・24・25・26・27・28	(愛媛、宇和島、新居浜、高知、中村、徳島、高松) 労音4月例会	同上	
7.24・25	浜松労音7月例会	ウェーバー＝「魔弾の射手」序曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第6番「田園」	
8.23	サマー・コンサート	ウェーバー＝「魔弾の射手」序曲／ベートーヴェン＝交響曲第6番「田園」／ベルリオーズ＝ハンガリー行進曲／ドヴォルザーク＝スラブ舞曲第10番・第1番／ラヴェル＝ボレロ	
9.26	日立労音9月例会	ワグナー＝「ローエングリン」第3幕への前奏曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	
10.11	新響第2合同演奏会		
12. 6	第8回定期演奏会	ワグナー「ローエングリン」第3幕への前奏曲／ベートーヴェン＝交響曲第8番／ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」	
66. 4. 4	第9回定期演奏会	ボロディン＝中央アジアの草原にて／伊福部昭＝交響譚詩／芥川也寸志＝絃楽のための三楽章／シベリウス＝交響曲第2番	
7.14	日ソ合同大音楽祭(渋谷)		
8. 1	新交響楽協会第1回合同演奏会(東京文化会館)		
8.13	平和音楽会(日音協主催)		
9. 5	新響創立10周年記念ベートーヴェン・チクルス (第1回)	ベートーヴェン＝交響曲第1番・交響曲第2番・交響曲第3番「英雄」	
10. 2	同上 (第2回)	ベートーヴェン＝「レオノーレ」序曲第3番・交響曲第4番・交響曲第5番「運命」	
11. 7	同上 (第3回)	ベートーヴェン「エグモント」序曲・交響曲第6番「田園」・交響曲第7番	
12.19	同上 (第4回)	ベートーヴェン＝交響曲第8・交響曲第9番「合唱付」	

年月日	演奏会名	曲目	おもな出来事・年度内その他の活動
67. 4.17	第14回定期演奏会	ベルリオーズ＝序曲ローマの謝肉祭／ハチャトリアン＝ガヤーネ第1番／レスピーギ＝リュートのための古風な舞曲とアリア第3番／ブラームス＝交響曲第4第	＊『音楽を愛する人に』筑摩書房より刊行
8.17	訪ソ記念特別演奏会	伊福部昭＝交響譚詩／カバレフスキー＝組曲「道化師」より／芥川也寸志＝絃楽のための三楽章／チャイコフスキー＝交響曲第5番	
9. 3	TBS録画		
9.17	日音協依頼録音(KRC)		
9.22～10.9	訪ソ親善演奏旅行		
9.25	ハバロフスク演奏会	グリンカ＝ルスランとリュドミラ序曲／ベルリオーズ＝ローマの謝肉祭序曲／カジラエフ＝レスギンカ／ガバレフスキー＝組曲「道化師」より／シベリウス＝フィンランディア／伊福部昭＝交響譚詩／芥川也寸志＝絃楽のための三楽章／チャイコフスキー＝交響曲第5番	
27	イルクーツク演奏会		
29	モスクワ演奏会		
30	モスクワ演奏会		
10. 3	レニングラード演奏会		
10.21	はたらく者の音楽祭		
10.22	日音協演奏会		
10.25	コンサート・コンサート録画(TBS)東響と合同		
12.14	第15回定期演奏会	コレルリ＝合奏協奏曲ハ長調Op.6-10／ドビッシー＝小組曲／ブラームス＝交響曲第2番	
68. 4. 8	第16回定期演奏会	ブラームス＝大学祝典序曲／メンデルスゾーン＝ヴァイオリン協奏曲ホ短調／ベルリオーズ＝幻想交響曲	＊『ヒロシマのオルフェ』ザルツブルグ・オペラ・コンクールに第一席入賞
4.21	美濃部知事革新都政一周年の集い	トッカータとフーガ／チャイコフスキー＝ロミオとジュリエット・1812年／芥川＝絃楽のための三楽章／レスピーギ＝ローマの松	
5.31	日音協依頼録音(KRC)		
7.22	日ソ青年友好祭レセプション出演		
7.28	第5回サークル交流会		
8. 8	東響・新響合同演奏会		
12.20	日音協依頼録画		
12.23･26	第九特別演奏会	バッハ・ストコフスキー＝小フーガト短調／ベートーヴェン交響曲第9番「合唱付」	
69. 1.15	港区成人の日のつどい出演	運命	＊サントリー音楽財団理事
1.19	TBS録画(東響、合唱団鯨と合同)		
2. 2	特別演奏会(石岡)	C.バッハ＝シンフォニア変ロ長調／モーツァルト＝交響曲第40番／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	
4. 1	第18回定期演奏会	C.バッハ＝シンフォニア変ロ長調／ベートーヴェン＝ピアノ協奏曲第1番／ショスタコーヴィチ＝交響曲第5番	
5. 5	子供のための演奏会(水戸)		
7.17	合唱団鯨演奏会賛助出演	ミシシッピー他	
7.27	新交響楽協会3楽団合同演奏会		
8. 4	サマーコンサート	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲・ウィーンの森の物語／チャイコフスキー＝眠りの森の美女／グロフェ＝組曲ミシシッピー／ロジャース＝南太平洋／ポーター＝カン・カン／レーウェ＝マイフェア・レディ	
10.26～11.4	第1回九州沖縄芸術祭参加演奏旅行		
10.26･29･30	新交響楽団演奏会(那覇、佐賀、長崎、大分、小倉、都城、鹿児島)	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」	
11. 1･2･3･4			
10.27	新交響楽団演奏会	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲／チャイコフスキー＝ヴァイオリン協奏曲二長調／ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」	
11. 2	(熊本、福岡)		
12.21	鯨・新響特別演奏会 “メサイア”	ヘンデル＝オラトリオ「メサイア」	

年月日	演奏会名	曲目	おもな出来事・年度内その他の活動
70. 4.13	第19回定期演奏会	リスト＝交響詩「前奏曲」／ハイドン＝交響曲第101番「時計」／ムソルグスキー・ラヴェル＝組曲「展覧会の絵」	
7. 1	合唱団鯨演奏会賛助		
8.17	スリーMクラブチャリティコンサート		
8.20	サマーコンサート	スッペ＝「軽騎兵」序曲／オッフェン・バッハ＝「天国と地獄」序曲／ニコライ＝「ウィンザーの陽気な女房たち」序曲／リスト＝ハンガリー狂詩曲第2番／ヘンデル＝組曲「水上の音楽」／グロフェ＝組曲「大峡谷」	
12.21・23	第九特別演奏会	バーバー＝弦楽のためのアダージォ／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	
71. 1.15	足立区成人式祝典演奏会		＊日本作曲家協議会副委員長に就任
4.18・22	第21回定期演奏会	バッハ＝管弦楽組曲第3番／ベートーヴェン＝ヴァイオリン協奏曲／ブラームス＝交響曲第3番	＊『音楽の基礎』岩波書店より刊行
4.25	レコード録音		
6. 1	合唱団鯨演奏会賛助		
8.10	サマーコンサート	タイケ＝旧友／メンデルスゾーン＝結婚行進曲／チャイコフスキー＝くるみ割り人形から行進曲／エルガー＝威風堂々／ブリテン＝青少年のための管弦楽入門／R.コルサコフ＝交響組曲「シェヘラザード」	
8.20	スリーMクラブサマコン		
10.28	第22回定期演奏会	芥川也寸志＝交響管絃楽のための音楽／モーツァルト＝フルート協奏曲第2番／マーラー＝交響曲第1番	
12.15・17	新響・鯨特別演奏会 ”第九”	バッハ・ストコフスキー＝パッサカリアと小フーガハ短調／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	
72. 2. 7	新響新春特別演奏会	バッハ・ストコフスキー＝パッサカリアと小フーガ／メンデルスゾーン＝ヴァイオリン協奏曲／マーラー＝交響曲第1番	＊ヤマハ音楽振興会理事に就任 ＊『音楽の遊園地』れんが書房より刊行
11.12	第24回定期演奏会	ベルリオーズ＝「ファウストの劫罰」より／モーツァルト＝2台のピアノのための協奏曲K.365／ベートーヴェン＝交響曲第7番	
11.23	FM東京「おはようコンサート」録音		
73. 3.24・25	第25回定期演奏会	チャイコフスキーの夕べ＝イタリア奇想曲／ヴァイオリン協奏曲／交響曲第6番「悲愴」	＊サントリー音楽財団理事に就任
4. 1	FM東京録音		
5.27	東京六大学合唱連盟定期賛助		
8.18	サマーコンサート	ベートーヴェン＝交響曲第6番「田園」／プロコフィエフ＝ピーターと狼／ガーシュウィン＝パリのアメリカ人	
8.25	アマチュア音楽の祭典出演		
11. 5	第26回定期演奏会	メンデルスゾーン交響曲第4番「イタリア」ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」／ストラビンスキー＝舞踊組曲「火の鳥」	
12.19・21	新響第九特別演奏会	ワーグナー＝トリスタンとイゾルデより「前奏曲と愛の死」／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	
74. 3.31	新響とショスタコービッチ（第27回定期演奏会）	モーツァルト＝交響曲第35番「ハフナー」／ドビッシー＝牧神の午後への前奏曲／ショスタコーヴィチ＝交響曲第5番	
5.17	芥川也寸志と弘中孝（新響名曲コンサート）	ベルリオーズ＝ローマの謝肉祭序曲／ベートーヴェン＝ピアノ協奏曲第4番／ドヴォルザーク＝交響曲第8番	
8.10・25	サマーコンサート	ハチャトリアン＝ガイーヌより第1組曲・第1組曲A／ビゼー＝カルメン第1組曲・ファランドール／チャイコルスキー＝「白鳥の湖」より	
12.15	ペトルーシュカ（第28回定期演奏会）	ベートーヴェン＝交響曲第8番／芥川也寸志＝絃楽のための三楽章／ストラビンスキー＝舞踊組曲「ペトルーシュカ」	

年月日	演奏会名	曲目	おもな出来事・年度内その他の活動
75. 4.23	新響鯨特別演奏会	シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／モーツァルト＝レクイエム	
6. 1	ストラビンスキー3部作(第29回定期演奏会)	ストラビンスキー＝舞踊組曲「火の鳥」・舞踊組曲「ペトルーシュカ」・舞踊組曲「春の祭典」	
8. 9	サマーコンサート	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲・狩・ウィーンの森の物語・トリッチトラッチポルカ／グールド＝ラテンアメリカシンフォニエッタ／ムソルグスキー・ラヴェル＝展覧会の絵	
8.17	吾穂青少年吹奏楽団演奏会賛助		
12. 8･9	第九特別演奏会	シベリウス＝フィンランディア／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	
76. 3.23	東京音楽アカデミー依頼録音		
3.29	第31回定期演奏会	シャブリエ＝スペイン狂詩曲／プロコフィエフ＝キージェ中尉／シベリウス＝交響曲第2番	
5.31	東京音楽アカデミー依頼録音		
7. 6	東京音楽アカデミー依頼録音		
8.23	東京音楽アカデミー依頼録音		
9. 3	日本の交響作品展	平尾貴四男＝古代讃歌／箕作秋吉＝小交響曲ニ長調／大木正夫＝組曲「五つのお伽噺」／尾高尚忠＝日本組曲／早坂文雄＝古代の舞曲	
10.11	日本の交響作品展	清瀬保二＝日本祭礼舞曲／安部幸明＝小組曲／高田三郎＝山形民謡によるバラード／諸井三郎＝小交響曲変ロ調／伊福部昭＝交響譚詩	
77. 4. 4	第76回演奏会	ショスタコーヴィチ＝交響曲第7番「レニングラード」	＊「芥川也寸志と新交響楽団」第8回鳥井賞受賞 ＊映画「八甲田山」の音楽
5. 3	NHK「音楽の広場」収録		＊NHK･TV「音楽の広場」開始
7. 2	TBS「オーケストラがやってきた」収録		＊映画「八ツ墓村」の音楽
8. 4	第77回演奏会	清瀬保二＝日本祭礼舞曲／箕作秋吉＝小交響曲ニ長調／尾高尚忠＝日本組曲／早坂文雄＝古代の舞曲／伊福部昭＝交響譚詩	＊日本音楽著作権協会理事就任
8	鳥井賞受賞記念コンサート		
11.30	合唱団鯨演奏会(日比谷公会堂)		
12.18	福生市演奏会(福生市民ホール)		
78. 4. 1	第79回演奏会 小倉朗交響作品展第1夜	小倉朗＝交響組曲イ短調／日本民謡による5楽章／オーケストラのためのブルレスク／交響曲ト調	＊第1回日本音楽アカデミー賞音楽賞受賞 ＊『人はさまざま、歩く道もさまざま』(正･続)芸術現代社より刊行
4.26	第80回演奏会 小倉朗交響作品展第2夜	小倉朗＝オーケストラのための舞踊組曲／ヴァイオリン協奏曲／弦楽合奏のためのコンポジション／オーケストラのためのコンポジション嬰ヘ調	
7. 2	レコード録音(東京音楽アカデミー)		
12.17	レコード録音(東京音楽アカデミー)		
79. 4. 6	第83回演奏会 日本の交響作品展3「早坂文雄」	早坂文雄＝映画音楽「羅生門」より／古代の舞曲／左方の舞と右方の舞／管弦楽のための変容	＊著作権審議会臨時委員に就任 ＊奏楽堂保存運動を始める ＊「歌の絵本」「歌の絵本Ⅱ」講談社より刊行
8. 4	第85回演奏会	芥川也寸志＝交響三章／チャイコフスキー＝交響曲第6番「悲愴」	
80. 1.15	NHK「音楽の広場」収録		＊第22回児童福祉文化奨励賞受賞(「ポイパの川とポイパの木」)
4. 6	第87回演奏会 日本の交響作品展4「伊福部昭」	伊福部昭＝オーケストラとマリムバのためのラウダ・コンチェルタータ／ヴァイオリン協奏曲第2番／タプカーラ交響曲	＊日本作曲家協議会委員長に就任
81. 1.18	福生市演奏会(福生市民ホール)		＊「反核・日本の音楽家たち」
4. 5	第91回演奏会 日本の交響作品展5「菅原明朗」	菅原明朗＝交響写景「明石海狭」／チマローザの断章による合奏協奏曲／アコーディオンのための協奏交響楽／交響的幻影イタリア／ファンタジア	＊日本音楽著作権協会理事長に就任 ＊「音楽を愛する人に」「音楽の旅」「音楽の遊園地」旺文社文庫より刊行
11.29	第94回演奏会	バッハー菅原明朗編曲＝パッサカリア／ショスタコーヴィチ＝交響曲第11番「1905年」	
82. 4. 2	第95回演奏会 日本の交響作品展6「清瀬保二」	佐藤敏直＝哀歌／清瀬保二＝郷土舞踊／エレジー－亡き母に捧ぐ／古代に寄す(改訂版)／ピアノ協奏曲(改訂版)／日本祭礼舞曲	＊成城学園理事に就任 ＊著作者作曲者協会国際連合理事に就任 ＊イタリア賞特別賞およびエミー賞優秀賞受賞(映像絵巻「月」)
9.15	第97回演奏会	ショスタコーヴィチ＝祝典序曲／伊福部昭＝日本狂詩曲／チャイコフスキー＝交響曲第5番	

年月日	演奏会名	曲目	おもな出来事・年度内その他の活動
83. 4. 3	第99回演奏会 日本の交響作品展7「青春の作曲家たち」	小倉　朗＝交響組曲イ短調／松平頼則＝南部子守歌を主題とするピアノとオルケストルの為の変奏曲／戸田邦雄＝交響幻想曲「伝説」／渡辺浦人＝交響組曲「野人」／別宮貞雄＝管弦楽のための「二つの祈り」	＊宮城フィルハーモニー協会、宮城フィルハーモニー管弦楽団音楽監督に就任 ＊著作権審議会委員に就任
4.23～24	飯田市演奏旅行(飯田)		
6.26	第100回演奏会	芥川也寸志＝交響管絃楽のための音楽／ベートーヴェン＝交響曲第9番	
9.23	NHK「音楽の広場」出演		
84. 1.22	福生市演奏会		＊NHK・TV「N響アワー」
1.29	第102回演奏会	モーツァルト＝交響曲第40番／伊福部昭＝オーケストラとマリムバの為のラウダ・コンチェルタータ／ショスタコーヴィチ＝交響曲第5番	＊著作者作曲者協会国際連合総会副会長に就任
4. 1	第103回演奏会 日本の交響作品展8「東北の作曲家たち」	伊藤俊幸＝オーケストラのためのコンポジション／佐藤喜美＝前奏曲「エメラルドの幻影」／林芳輝＝箏と管弦楽のためのラプソディ／安達弘潮＝語部とオーケストラの為の交響的物語「遠き神々の物語」／片岡良和＝抜頭によるコンポジション	
7.15	東京都アマチュアオーケストラ連盟シンポジュウム参加		
10.28	第1回アマチュアオーケストラフェスティバル出演		
11.23	伊福部昭古稀記念交響コンサート出演		
85. 4. 7	第107回演奏会 日本交響作品展9「小山清茂」	小山清茂＝管弦楽のための「信濃囃子」／弦楽のための「アイヌの唄」／テープを伴った管弦楽のための「鄙歌」第1番／管弦楽のための「うぶすな」／交響組曲「能面」	＊紫綬褒章受章 ＊第37回日本放送協会放送文化賞受賞
4.20	三田レコード鑑賞会演奏会出演		
9.16	清真学園演奏会出演		
10. 6	東京都アマチュアオーケストラ連盟シンポジウム参加		
10.27	羽生文化会館演奏会出演		
11. 3	第109回演奏会	ベルリオーズ＝序曲「ローマの謝肉祭」／ベートーヴェン＝ピアノ協奏曲第5番「皇帝」／チャイコフスキー＝交響曲第4番	
12.22	三多摩合唱団第九演奏会(立川市民会館)		
86. 7.20	第111回演奏会	モーツァルト＝交響曲第39番／ショスタコーヴィチ＝交響曲第4番(日本初演)	＊東京交響楽団、中国演奏旅行顧問として同行
9.23	第112回演奏会	山田耕筰＝音「曼羅陀の華」／ストラヴィンスキー＝バレエ組曲「火の鳥」(1919年版)／ベートーヴェン＝交響曲第5番	
10.26	第3回アマチュアオーケストラフェスティバル出演		
11.24	大和市JC演奏会		
11.30	第113回演奏会 日本の交響作品展10「新響と三十年－芥川也寸志」	芥川也寸志＝アレグロ・オスティナート／絃楽のための三楽章／交響管絃楽のための音楽／エローラ交響曲／交響曲第1番	
87. 1.25	東京第三友の会演奏会		＊上海国際音楽コンクール審査員
2. 1	第114回演奏会(サントリー音楽賞受賞者コンサート)	平尾貴四男＝古代讃歌／小倉朗＝オーケストラの為の舞踊組曲／早坂文雄＝左方の舞と右方の舞／伊福部昭＝タプカーラ交響曲	
4. 5	第115回演奏会『中国作品展』	李煥之＝春節序曲―大秧歌／呉祖強＝二泉映月／チャイコフスキー＝ヴァイオリン協奏曲ニ長調／朱践耳＝納西一奇	
88. 4. 3	第119回演奏会『マヌエル・デ・ファリャ』	ファリャ＝歌劇≪はかなき人生≫より／交響的印象≪スペインの庭の夜≫／恋は魔術師／舞踊音楽≪三角帽子≫第2組曲	
4.24	旧東京音楽学校奏楽堂演奏会	芥川也寸志＝絃楽のための三楽章／モーツァルト＝交響曲第39番、40番	

BUNKYO 〒112東京都文京区小石川2-1-11☎03(811)2084
世界の名器を常時、多数在庫いたしております。



外観の美しさ、曲線の至上美、
完璧な音色——ピグマリウス。
Pygmalius

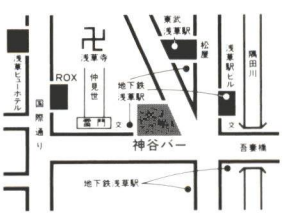


明治生まれの粋なカクテル
『デンキブラン』
甘い香りのハーモニーを、お聴きください。

創業明治13年——デンキブラン

神谷バー

1階神谷バー 2階レストラン 3階和風割烹 浅草1丁目1番1号
☎03(841)5400 ご宴会・ご商談にもご利用ください。(火曜定休)




サニティの音楽のように。
どこからともなく近づいてきて
気持ちのひだを洗い流し
あなたを大きく広げるもの。
あなたが自由に動けるようにするもの。
そう、エリック・サティの音楽のように。
東京ガスはなりたい。
いや、すでにそうしている。
清潔で広がりある空間を生みだす
私たちの仕事。
東京を、都市をどんどん素敵にして行くと
信じて。
東京が素敵になる。
TOKYO GAS

まもってほしいのは、ハートです。



音楽には著作権があります。人で言うなら、それはハートです。作詩家や作曲家が、夢と感動を美しい〈かたち〉にした音楽——それを健やかに育てるために、JASRACは音楽のハートを大切に、その確かな鼓動を見守りつづけています。

JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本 美由起

〒105東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)502-6551